

平成二〇年度修士論文

# 密教に根ざした企業経営者の経営倫理形成

大学院文学研究科

密教学専攻修士課程

永 田 良 一

## 目次

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 序 本稿の目指すところ                        | 1  |
| 第一章 空海思想と偉業                        | 2  |
| 一. その生涯                            | 2  |
| 二. 主著への私見Ⅰ（即身儀、心経秘鍵を中心として）         | 5  |
| 三. 主著への私見Ⅱ（秘密曼荼羅十住心論を中心として）        | 9  |
| 四. 事績への私見<br>（綜藝種智院開創と満濃池修築を中心として） | 11 |
| 第二章 空海思想と「理念経営」                    | 13 |
| 一. 「理念経営」総説                        | 13 |
| 二. 教相判釈と企業ブランド力について                | 16 |
| 三. 十住心論に見られる心品転昇と企業の発展について         | 19 |
| 第三章 大欲の実践                          | 21 |
| 一. 「メディポリス指宿」事業について                | 21 |
| 二. 「二一世紀高野山医療フォーラム」について            | 26 |
| 三. インターナショナルスクール創設について             | 28 |
| 結語                                 | 31 |
| 脚注                                 | 33 |

序 本稿の目指すところ

宇宙へ繋がり、広大無辺にして光に満ちた父なる『空』。深い慈愛に溢れ、全ての生命の源である母なる『海』。この二つの大いなる存在を僧号に冠した弘法大師空海は、“ありがたや 高野の山の 岩かげに 大師はいまだ おわしますなる”のご詠歌に象徴されるように、在世中から禁裏をはじめ庶民の間でも篤実な信仰の対象であり、今なお高野山の奥の院で衆生を見守り続けていると信じられている。

その生涯、思想や事績は、学術書や入門書、小説等の出版物をはじめとする膨大な各種情報により、広く知られるところであるが、本稿は、空海の密教教学が現代における企業経営にどのような示唆を与え、どのように実践されて具現化できるか、について実証的に論考することを目的としている。

より具体的には、

- (一) 密教の包摂性・統合性、並びに空海の衆生救済にかけた情熱を反映させた企業経営とは、いかなるものか。
- (二) 空海の主著『秘密曼荼羅十住心論』に見られる心品転昇と私が目指す「理念経営」の関わりとは、いかなるものか。
- (三) 企業経営における「無相の三密」とは、いかなるものか。

以上の三点を、実際に私が営む事業における実践を通じて論述していくことである。

空海は、「理論人と実際人との二つの面をそなえた人間」<sup>1</sup>であるとか、「スケールの大きな探求と思索、さらにはその成果」<sup>2</sup>とか、「多彩な社会活動（中略）を重ねながら、（中略）数多くの教学の書をあいついで、世に送り出し」<sup>3</sup>等々、動と静、思惟と行動、教学確立と社会的実践の妙なる調和の人と評されることが多い。的を射た評であると首肯するものの、敢えて私は、「空海は、情熱と行動の人である。」と評したい（本件については第一章 四. で詳述）。

本稿も、弘法大師空海を「情熱と行動の人」と位置付けた視点で論考を進めていく。私自身、日々の事業活動を営む上で、大欲（大いなる欲＝夢や理想）を持ち、企業価値の向上と社会貢献を旨とした理念経営を推進していく（大欲を成就する）ためには、「情熱と行動」こそが、欠

かすことのできない必須の要因と認識しており、空海の事績を振り返るとき、そこには必ずたぎるような（ときとして静かに秘められた）情熱と、果敢な行動力が見受けられるからである。

本稿は、これまでの高野山大学における真言教学、空海密教学の学習の集大成であるとともに、私が手がけている事業活動並びに周辺関連活動を完遂するための決意表明、宣言書ともなるであろう。

## 第一章 空海思想と偉業

### 一. その生涯

空海は、奈良時代も終わりに近い宝亀五（七七四）年<sup>4</sup>六月一五日、讃岐国多度郡屏風浦（現在の香川県善通寺市付近）に生まれ、幼名を真魚といった。父は佐伯直田公、母は阿刀氏の出自で、母方の伯父に、都で桓武天皇の第三皇子である伊豫親王の侍講を務める阿刀大足がいた。

延暦七（七八八）年、空海は一五歳の頃、入洛し、阿刀大足に就いて論語・孝経・史伝等を学ぶ。延暦一〇（七九一）年、一八歳にして、大学の明経科に入学し、明経道博士の岡田牛養や直講の味酒浄成らに毛詩・尚書・春秋左氏伝などの漢籍を学んだ。空海は幼少より「貴物（とうもの）」、「神童」と呼ばれ、聡明な少年であったが、大学時代には「雪螢を猶怠るに拉ぎ、縄錐の勤めざるに怒る」<sup>5</sup>と自ら述懐するほど刻苦勉励した。しかしながら、当時の大学は真理の追求の場ではなく、中央や一部地方の名士の師弟を集めた官吏養成機関であった。出世や栄達に執着のない空海は、大学での空虚な教育に飽きたらず、躊躇なく大学を去ると、山林の修行者の群れに身を投じる。

『三教指帰』の序には、大学退学の前後に一人の沙門と出会い、虚空蔵求聞持法を授けられたとある。空海は、この虚空蔵求聞持法に強く惹かれ、阿波の大滝ヶ岳や土佐の室戸崎、伊予の石鎚山などでこの法を修し、結果、明星来影の効験を得る。そして、「朝市の栄華念念に之を厭ひ、巖藪の煙霞日夕に之を飢ふ」<sup>6</sup>として、出家の決意を確固たるものとしたのである。私も機会を見ては虚空蔵菩薩真言を唱えているが、不思議とところが鎮まり、鎮魂のパワーを持つと感じている。

延暦一六（七九七）年、二五歳を目睫に控え、『聾瞽指帰』を撰述した。後に序と結頌の「十韻の詩」を大幅に書き改め、題名も『三教指帰』と改題されるが、「空海の官界での出世を期待していた両親や親族に告白した精神的な独立宣言書」<sup>7</sup>、「儒教、道教、仏教と、おのれの魂の遍歴をした自伝をドラマツルギーの形で語ったもの」<sup>8</sup>、「青年期の学問に対する成果が虚構の文学の中に集約されたのみならず、自らの思想遍

歴と最終的な仏教選択をリーディングドラマ風にまとめた」<sup>9</sup>もの、と位置付けられており、私見もそれらに従う。

『聾瞽指帰』撰述後の空海の足跡には不明な点が多い。次に空海が歴史の舞台に姿を現すのは、延暦二三（八〇四）年、出家得度して第一七次遣唐使団の一員として渡海入唐する場面である。渡唐の動機は、第一章 四. に詳述するが、ここでも空海が「情熱と行動」の人であることが如実に窺える。ちなみに、同時期、空海とは別の船で天台座主最澄が短期滞在の請益僧として入唐している。

渡唐後、数々の苦難を乗り越えて唐都長安に辿り着いた空海は、真言密教付法の七祖恵果阿闍梨のもとで矢継ぎ早に胎蔵・金剛界の両部の灌頂、ついで伝法灌頂を授かり、「遍照金剛」の密号を受けた。さらに空海は、恵果から新旧訳経、梵字真言讃、論疏書、図像、法具等を伝法の印信として与えられている。恵果は空海への伝法を終え安心したのか、延暦二四（唐暦：貞元二一、八〇五）年の暮れ、示寂する。その夜、空海の夢枕に立った恵果の夢告により、空海は日本に帰り密教宣布に努めんと決意する。そもそも空海は、渡唐後二〇年間の滞在・修学を義務づけられた留学僧であり、留学期間を縮めての帰国は「闕期の罪」に問われかねない国家に対する造反行為であった。空海自身、そのことを自覚していたであろうが、罪に問われる可能性が高いことを承知で帰国の途に就いた空海に、密教宣布にかけた熱い情熱と、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」的な果敢な行動力が窺える。

帰国後の空海は、直ちには京に向かわず、船が着いた筑紫の地に暫時滞留し雌伏のときを過ごす。帰朝報告書『御請来目録』を入京復命する高階遠成に託し、入京の時期を窺っていたものと思われる。帰朝から三年が経過した大同四（八〇九）年、空海は漸くにして京の地に足を踏み入れ、高雄山寺に入住する。ほどなく、同時期に入唐し、空海より一足早く帰国していた最澄から、空海が唐から持ち帰った密典借覧の要請が寄せられるようになる。その後も最澄は空海からたびたび経典を借覧し、筆写している。また、両部の灌頂と真言付法を請うことも頻回に及んだ。最澄が、経典は写経・読誦、すなわち、専ら視覚・聴覚に頼った筆授をもって密教

の奥義を会得できるという考えを持っていたのに対し、唐において恵果阿闍梨から師資相伝で伝法灌頂を受けた空海は、子弟が一对一の差し向かいで、魂の交流をもって密教の奥義を受ける面授を不可欠と位置付けていた。両者の伝法の捉え方には、「頭で理解する」とことと「全身で体得する」とことの差が厳然と横たわっている。

弘仁三年（八一二）、高雄山寺における金剛界結縁・胎藏結縁の二度の灌頂を経て、最澄は阿闍梨灌頂を伝授するよう空海に願ったが、なお三年の修学を要す、と断られている。また、翌弘仁四年（八一三）には、阿闍梨灌頂を受けずして、『理趣経』の請借を申し出た最澄に対し、空海は師伝を受けずに密法を学び伝える違越の行い、「越三昧耶」にあたると厳しく非難している。最終的には、「法華、金光明は先帝の御願なり、また一乗の旨、真言と異なることなし」、すなわち法華一乗と真言一乗は大乗仏教という点で相違がないと解する最澄と、「顕密の教、何ぞ深淺なからん。法智の両仏、自他の二受、顕密説を異にして、権実隔てあり」、すなわち密教は他の仏教（顕教）を包含・統合する別次元の教えとする空海は、その密教観の決定的な相違により、弘仁七（八一六）年の空海からの經典返還催促の書簡に対する、最澄の極めて事務的な返信を最後に、足掛け八年に及ぶ交友を断つこととなる。以後、二人は再び顔を合わせることも、文を交わすこともなかった。

空海が、唐において恵果和尚から真言兩部の大法を相承し、かつ、伝法阿闍梨位の灌頂を受け、真言密教付法の八祖となり、帰国後、自己の教学を確立までの推移を略述すると、以下のようになろう。

- (一) 唐からの帰国後の一〇年〔八〇六（大同元）年～八一六（弘仁七）年〕：顕密の立場の相違を明確に打ち出す密教の移植期間。代表的著述は『弁顕密二教論』。
- (二) 東寺給預〔八二三（弘仁一四）年〕まで：密教の正当性を立証し、密教の思想的立場を理論的に鮮明にする教学確立時代。「三部書（『即身成仏義』、『声字実相義』、『吽字義』）」の撰述期。
- (三) 天長・承和年間：密教宣布の完結期。仏教諸宗のそれぞれの教学を、密教の立場によって包摂しようとする姿勢の明確化。

主著『秘密曼荼羅十住心論』。

主要撰述書については、後段で論述するが、空海教学の構成の完璧さ、隙のなさ、「日本史上もっとも形而上的な思考を持ち、それを一分のくるいもなく論理化する構成力に長けた観念主義者」<sup>10</sup>、「悪魔的なほどに複雑な論理を構築する男」<sup>11</sup>という、一読して悪罵とも取れる評言において、もっとも劇的に、かつ、最大限の賛辞として表わされていると考える。

空海の実言宣布の活動は、教学の確立と並行して旺盛に進められる。それは、鎮護国家の思想を基礎として国家・国王・国の民草を災厄・災難から免れさせるという活動である。弘仁六（八一五）年四月、弟子たちに勧縁疏を携えさせ、甲斐・武蔵・常陸などの東国各地や筑紫などの西国地方に遣わし、全国の有縁の国守や名僧らに自らが請来した密教の主要経論三六巻の書写流传を勧進している。

弘仁七（八一六）年六月には、修禪の道場として高野山を請う上表文を嵯峨天皇に提出し、翌七月には聴されている。実際に空海が現地に赴いて禪院の経営に当たったのは弘仁九（八一八）年の冬になってからである。若い頃から好んで山林を渉覧し、また、都における修法・加持祈祷など、真言宗祖としての公務に追われていた空海にとって、高野の閑林で独座黙然することは、本来の自分に立ち返る掛け替えのない大切な時間であったに違いない。

一方でこの時期、精力的に撰述を行い、『弁顕密二教論』、『般若心経秘鍵』、『三部書』などが立て続けに著されている（第一章 二. で論及）。

弘仁一四（八二三）年一月、東寺を給預され、勅命により教王護国寺と号す。一〇月には「三学録」を即位間もない淳和天皇に進献し、他宗の雑住を禁じる官符を得る。空海は唐から請来した仏像、仏画、経巻、法具などの悉くを東寺に移した。そして東寺を荘厳な三次元の曼荼羅として構築した。先に開創した高野山が大自然に囲まれた修禪の道場であり、東寺が都に置かれた真言宣布のための教育機関を兼ねた密教の根本道場と位置付けることができよう。ここに至って真言教団の基盤は磐石となり、年分度者の勅許を受ける態勢が固まったと言える。

天長二（八二五）年には、東寺講堂建立の勅

許を得、天長五（八二八）年には、総合私立大学の嚆矢とも言うべき「綜藝種智院」を東寺の隣接地に開創している。また、天長七（八三〇）年には淳和天皇の勅を受け、畢生の大作『秘密曼荼羅十住心論』を撰述している。まさに密教宣布のために八面六臂、獅子奮迅の活動を展開しており、教学の充実と社会活動を含めた実践が見事なまでに調和し、形になる様は、芸術的とも言える。空海の「情熱と行動の人」としての真価が遺憾なく発揮された時期といえよう。

しかし、天長八（八三一）年五月、病を得、体調を崩し、翌月には大僧都の職を解いて欲しい旨の上表文を淳和帝に提出する。この願いは聞き入れられず、勅答は「おん身はよろしく密宗の法流をうるおして、僧統の職を辞めるべきではない。（中略）おん身も平癒のうえ再び参内せられよ。」<sup>12</sup>というものであった。

天長九（八三二）年八月、高野山において万燈・万華会の二会を催す。万燈会の際の願文「虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きなむ」は、「永遠の誓願」と呼ばれ、空海が森羅万象、三千世界の遍く存在へと慈愛を注ぐ一句として夙に有名である。体調を崩しながら、かくも広大にして無辺なる誓願を抱き続けた空海の精神力には感服するほかない。

承和二（八三五）年一月、真言宗に年分度者三人の勅許が為され、さらには二月、金剛峰寺が官寺に準ずる定額寺として認可される。それまでの空海の真言宣布の地道な活動が一举に花開いた感がある。同年三月一五日、弟子たちに二五箇条の遺戒を残し、三月二一日、永遠の定に入る。行年六二であった。

## 二. 主著への私見 I

(即身義、心経秘鍵を中心として)

三部書とは、真言宗祖空海の重要書三部の意で、『即身成仏義』、『声字実相義』、『吽字義』をいい、それぞれが三密の身口意に配当されている。ここでは、空海教義の真骨頂とも言うべき『即身成仏義』、並びに『般若心経秘鍵』を中心に考察を加える。

### 【即身成仏義】

『即身成仏義』は、空海密教体系の中核にして根源を成す即身成仏思想を論述した空海著述の中でも最重要に位する論書である。諸先達の先行研究においても、「単にそのテキストを読むだけでは、本当は理解することが難しい」<sup>13</sup>、「無類の難解書」<sup>14</sup>、「かなり難解な箇所がある」<sup>15</sup>、「先人・仏説の引証で充ち満ちており、著作といわんよりはむしろ編著である。この点が空海の著作を難解というのであろう」<sup>16</sup>等の言及が見受けられるとおり、梵字の並ぶ原典は至極難解で、現代語訳・意識に頼ってようやく臆げな輪郭が捉えられる限りで、単に字句を追うだけでは、その真意に辿り着けそうにない。試みに、二頌八句の偈頌を繰り返し音読し、全文に亘る音読を数次行ったところ、音の響きと文字の構えが相応・融合し、ぼやけていた輪郭がわずかながら明確な形を取り始めた。その教えの深奥に至るまで十全に把握するには、今後も精進を積みねばならないが、空海の言霊に心身を委ね、観想を重ねることにより、難解さはいつしか氷解し、森羅万象が自在に調和し融和していくことを期待する。空海言葉には、心身に深く静かに染み渡る律動がある。『声字実相義』の「五大に皆響き有り。十界に言語を具す。」<sup>17</sup>、また、『般若心経秘鍵』における「真言は不思議なり。観誦すれば無明を除く。」<sup>18</sup>という境地を実感した想いである。

「六大無礙常瑜伽」とは、即身成仏二頌の冒頭の第一句である。六大とは、森羅万象を在らしめている根源的な本体を指す。地・水・火・空・風の五大に識大を加えたものであり、空海教学の根本とも言うべき「六大体大」＝真理の当体、「四曼相大」＝真理の様相、「三密用大」＝真理の作用、の三面の第一に位置付けられる。

その六大が自在に調和しつつ、互いに妨げ合うことなく渉入・相応しながら形成されている、という法身大日如来の徳を称えている句である。仏も凡夫もみな六大によって構成されているのであるから、体大の観点からは差別なく平等である。故に凡夫の体も仏と一如一体、すなわち「即身（この身このまま）」という意である。

宮坂宥勝は、空海の六大説には「創唱的な、重要な問題点が含まれている。」<sup>19</sup>として、次の三点を挙げている。

(一) 六大それぞれの要素が、縦横無尽の相関関係によって成立していること。

(観念論と唯物論との相関共存的な意味での二元論的融合論であること。)

(二) 「法爾の六大」と「随縁の六大」の二種が説かれていること。(法爾が普遍性あるいは全体、随縁が特殊性もしくは個の存在を表し、双方とも不可分な関係にあること。)

(三) 五大を物質的存在、識大を精神的存在と二元対立的な分類をしないこと。

(六大をそのまま法身という宗教的実在、宗教的人格体とすること。)

ここにおいて着目すべきは、六大説には空海密教教義の包摂性、融和と利他行の実践を旨とする宇宙観・生命観が余すところなく語り尽くされている、という点であろう。人類が大気圏外へ飛び出し、実際に地球の外の存在、すなわち外宇宙(アウトースペース)の荘厳さと圧倒的な広がりとを目の当たりにする千百年以上も昔に、この宇宙に存在する全て、物質のみならず観念や精神・思惟までもが渾然一体となって、差し障りも妨げもなく常恒に連関し合い、在り続ける、という広大無辺なる思想を紡ぎ上げた空海の内宇宙(インナーコスモス)の闊達自在さと、深遠にして高邁なる叡智は、我が国のみならず広く世界に誇るべき完成度と普遍性を有していると断言しても過言ではあるまい。

「三密加持速疾頌」とは、即身成仏偈の第三句である。前の二つの句によって、六大(真理の本体論)と四曼(真理の象徴論)を述べ来った空海は、この第三句において、三密(真理の実践論)に言及する。

「三密」とは、宇宙の働き・活動・作用を表

わし、身密（身体的活動、物質的側面）、口密（言語的活動、波動的側面）、意密（思索的活動、精神的側面）を指す。

大日如来の身体的作用である身密は、宇宙の隅々にまで遍満しており、行者はその動きそのものを、極度に象徴化された手の動き「印」で表象する。三部書においては、本書『即身成仏義』が身密の解説書に配当される。

万物は言語・声音の作用で形成される。声音には波動エネルギーと慈悲と智慧が具備されており、行者が真言を唱えることで大日如来の化身と化す。真言の波動エネルギーが行者の呪力の源となり、真言の慈悲が行者をして菩薩行を行ざしめ、真言の智慧が行者のこちらの宝蔵を開く。これが口密である。三部書では、『声字実相義』が口密に配当される。この中で空海は、大日如来の声字（言葉と文字）は、人間界で用いられる言語概念を遙かに超越し深秘広大であると説く。五大・十界・六塵は皆声字であり、法身であり実相であるが、衆生はそのままでは法身の言葉である如来の声字の深秘を聞くことが叶わない。これを随縁の形として如実にしたのが、金胎両部の大経であり、両部の曼荼羅であり、三密の修法であると説くのである。如来の声字は耳だけをもって聞くことはできない、こちらの耳を研ぎ澄ませ、五感の全て、肉体の全てをもって感得せよ、と空海は説くのである。

意密はこちらの最も深い内奥の意識で、「理」とも「法」とも言う。偉大なる調和や秩序を成り立たせる法則を指す。行者は意密を成就すべく、深い瞑想に分け入り、大日如来の智慧との合一を図る。三部書では、『吽字義』が意密に配当される。空海が真言・陀羅尼の本質について論じた書で、吽の一字真言を縦横無尽に解釈・解説し、この一字に千巻万巻の経論悉くを摂し、一切の仏法をこの一字に収めるというアクロバティックな、ほとんど超絶的ともいえる言語の象徴論を空海は展開する。吽の一字に重層的な意味を読み込み、吽字はあらゆるものを包含し、吽字によって生滅・因果・損益・増減の対立を離れて、永遠・絶対・無限・常楽の如来の境地を体得し、有限に即して永遠を生きる極地を説く究極の言語哲学の書である。

これら全ての営みを「加持」、すなわち、一心に仏の営みと通じ合わせようと没入し、帰命

することで、即身成仏は結実すると空海は説く。空海教義の中核を成す即身成仏思想の実践論がここにおいて展開される。

「加持」とは、如来の大悲と衆生の信心を表わす。空海は、仏の太陽（徳）が衆生の清浄なこちらの水面（菩提心）を照らし出すことを「加」といい、修行する人々のところが、仏の太陽の光をよく感じ映し出すことを「持」という。すなわち、「加持」という語を「加」と「持」とに分割し、前者を聖なる仏が俗なる衆生を加護すること、後者を修行に励む人々が仏の力添えを享受することであると、双方が相応してはじめて速やかに偉大な悟りの境地を得られると説く。

私は、千二百年の時空を超えて呼びかけてくる弘法大師空海の声聞き、想いを受け止め、済世利民のために菩薩行を積むことこそが真の意味での「加持」であると考えている。

『即身成仏義』には、様々な現代語訳がなされている。特に二頌八句の第三句は、「仏と凡夫（よのひと）との三つの神秘の作用（はたらき）がたがいに加持（ちからぞえ）するがゆえに速やかに悉地（かないごと）をあらわす」<sup>20</sup>とする梅尾祥雲訳が、私のところには最も訴えかけるものがある。鍵となる語は「たがいに」である。加持とは、仏と衆生の感応、すなわち相互作用であり、「呼応の原理」<sup>21</sup>に基づくものである。決して、いずれかの一方通行ではなく、作用と反作用の二つの力が一つになってはじめて成立するものである。

即身成仏思想は、彼岸に救いと安住を求めるのではなく、現世を密厳国土とすべく、三密の実践によって三阿僧祇劫という果てしない時間を経ることなく、この身このまま・たちまちに仏の位を顕現できると説く空海教義の真骨頂であり、真言宗と他宗との差異を最も端的に表わす標幟と言えよう。

印契を結び、真言を唱え、こちらを三摩地に住するという、いわゆる形式を踏んだ三密行を「有相の三密」と言い、一切の形式に捉われず、行住坐臥の全てを三密行とすることを「無相の三密」と言う。私の目指すところは、企業における事業活動を通じて「三密」を行うこと、すなわち、事業で得た利益を新たな事業展開に必要な範囲で内部留保しつつ、最大限、株主と従

業員と社会に還元していく身密、経営者として社内外での発言・発信責任を完遂し、周囲に活力と勇気をもたらす口密、さらなる企業価値の向上と、社会貢献を通じた公益性の向上に直結する事業計画を打ち出していく意密、の三密を実践し続けながら、呼吸や瞬きと言った日常的に意識することのない身体活動や、何気なく口にした言葉、ふとした気づきなどの日常生活の営み全て、換言すれば私という存在が無意識のうちに、濟世利民につながり、「無相の三密」の実践に結びついている、という状態である。

弘法大師空海は、いみじくも即身成仏偈の冒頭の「六大無礙常瑜伽」において、宇宙の絶対的真理を表わす状態を喝破され、第三句の「三密加持速疾頓」において、真理に到る方法論を説かれたのである。

#### 【般若心経秘鍵】

『般若心経』は、「心経」の略称で呼ばれることも多く、本文二六二字、経題などを含めても二七六字という極めて短い経典である。その簡略さゆえ、また、「色即是空、空即是色」などのフレーズに代表される「空」の思想の知名度ゆえ、現代日本においても夥しい数の入門書、解説書が出版され、いかに「心経」を読誦し、いかに実生活に活用し、いかにしてこころの安らぎを得るか、といった事柄が説かれている。古今を通じて、もっとも親しまれ、人気の高い仏教経典であると断じて過言ではないであろう。

『般若心経』は、観自在菩薩が己の悟りの内実を舍利子に語りかける体裁を持ち、大乘仏教を代表する全六〇〇巻という大部な量を持つ『大般若経』経典群の精要である、とするのが通説である。その提要は、あらゆる現象は、単独で自立した固定的な本質（自性）を持たず、無限の関係性の中で絶えず変化しながら生起する出来事であるとする「空」の思想に求められるとする。

一方、空海は、真言密教の観点から『般若心経秘鍵』において、画期的ともいえる独自の『般若心経』観を展開する。まず、その大意序において、『般若心経』は「大般若菩薩の真心真言の三摩地の法門」、すなわち、大般若菩薩の内証三昧であると喝破する。「心経」が大乗的な法（非

人格的存在）を説く経典ではなく、般若菩薩という人（人格的存在）の悟りの境地とみる点に空海の斬新な「心経」観が汲み取れる。

さらに、『般若心経』には、声聞・縁覚の小乗から、大乘諸宗派、そして真言の教えまで仏教のあらゆる教えが盛り込まれていると説き、その利益には誦持講供すれば抜苦与樂の効験があり、修習思惟すれば悟りを得ることができる、という甚深なる功德があると賛辞を送る。また、本論である正宗分において、「心経」の本文を五分割し、各段で、「心経」のどの箇所が、どのような理由で各宗の教えに該当するのかを述べている。「人法総通分」では、因・行・証・入・時という悟りに至る段階と時間の遅速を挙げ全文を総括し、「分別諸乗分」では、建（華嚴宗）・絶（三論宗）・相（法相宗）・二（声聞・縁覚）・一（天台宗）の諸宗の教義を分析し、「行人得益分」では、六乗に真言を加えた七乗の修行の結果（利益）を説き、「総帰持明分」では、全ての教えが真言に帰すること、「秘藏真言分」では、全ての教えの行果が心経末尾の真言呪に含まれると説く。つまり、空海は『般若心経』が、「空の思想」に主眼を置いた顕教の経典ではなく、呪文を主体とした密教経典である、との見解を示されたのである。

空海自身、大意序において「釈家多しと雖も、未だ此の幽を釣らず。」と述懐されているとおり、『般若心経秘鍵』は『般若心経』解釈史にコペルニクスの転回をもたらしたといえよう。『般若心経秘鍵』が、単なる『般若心経』の字句注釈に留まらず、真言密教の観点から独自の、大胆な解釈を施した論説であり、比類なき独創性を有し、後世に多大なる影響を及ぼしたことは、後に『般若心経』そのものよりも、『般若心経秘鍵』に対する研究書、注釈書が多数編まれた、という史実をもって証明される。

特に、私は、秘藏真言分における「真言は不思議なり。観誦すれば無明を除く。一字に千理を含み、即身に法如を証す。」という一節が、空海独自の『般若心経』観を如実に表わしていると考える。空海は、「真言」、すなわち真なる言葉は、日常的な思量を超越した“不思議”である、と説かれる。“不思議”とは、にわかには感得できず、的確に表現できないが、精妙な功德・利益が確かに自分の近くに、あるいは、自分の

中に存在していることを自覚する心象である。この一文に「敢えて、真言の“不思議”を、人間の思惟という有限の枠に当てはめて矮小化する必要はありません。経文の一字一句には妙なる無量無辺なる真理が含まれています。無理に頭で理解しようとせず、真言をこころの中で観想し、口にして読誦することで三昧の境地に達してください。」という弘法大師の時空を超えた大いなる励ましの意を汲み取る。今回、『般若心経秘鍵』を読み解くことによって、『般若心経』誦唱の意味合いがさらに理解できた。小手先の字句解釈は、物事の表面のみを見て判断を下す浅略釈である。解釈できずとも、その本質に秘められた真価を感得できれば深秘釈の境地に辿り着くことができる。すなわち、三密の実践行によってこそ、真言の功德がもたらされるとする空海教判の真髓に一步近づくことができた、との想いを強く感じさせられたのである。

以下において、『般若心経秘鍵』が、単なる『般若心経』の注釈に留まらず、衆生済度の観点から綴られた「祈りと願いの書」であると考えられる箇所を指摘し、私見を添える。

大綱序の「哀なる哉、哀なる哉、長眠の子。苦しい哉、痛い哉、狂酔の人。痛狂は酔わざるを笑い、酷酔は覚者を嘲る。」の部分に、空海の廣大無辺なる大慈大悲のこころを特に強く感じる。ただひたすらに惰眠を貪る者、酒に酔い痴れ、迷いの世界を彷徨する者。これら凡夫は、覚者を嘲笑する始末である、という意であるが、ここで空海は、迷える者達を救いようのない愚者と断じているのではない。悟りの世界は、人知れぬ遠い彼方にあるのではなく、他ならぬ自分自身の中にある。その真理に一刻も早く気づき、覚醒せよ、精進せよ、と叱咤しこころを痛め懊悩しているのである。大いなる嘆きである。尋常ならざる嘆きである。私は、この大綱序における空海の嘆きに、『性霊集補闕鈔』巻八に収められた「高野山万燈会願文」の中の、「永遠の誓願」と呼ばれる「虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きなむ」という一節を思い浮かべる。この一文には、空海の宇宙観・密教観が如実に顕在しているものと考ええる。宇宙の大生命体と自己の生命とが本来的に同一であることを説く、人間を含む全生命・全存在の大いなる肯定の思想が壮大なスケールで展開されて

いる。いわば、密教が仏教系の思想のみならず、森羅万象ありとあらゆる存在と思惟を包摂し、かつ調和を図る極めて気宇壮大な総合志向を有していることを雄弁に物語っているといえよう。

氷山は、海面上に表わした姿の十倍の体積を海面下に秘しているといわれる。全十巻という大部の分量を持ち、膨大な諸経典からの引用・傍証で彩りつつ、人間精神の発達段階を諸思想になぞらえ、真言密教の統合性・包摂性・超越性を説いた『秘密曼荼羅十住心論』が、空海思想の集大成であることは否定しがたい事実である。空海の主著として脚光を浴びることの多い『秘密曼荼羅十住心論』であるが、その背景(海面下)に、短文であるが『般若心経秘鍵』の如き甚深なる思惟が控えていると考えるとき、空海思想の底知れぬ奥深さに震撼させられるのは、私一人ではあるまい。

### 三. 主著への私見Ⅱ

(秘密曼荼羅十住心論を中心として)

『秘密曼荼羅十住心論』は、空海教義の集大成とも言えるべき主著で、天長七（八三〇）年、淳和天皇の勅により撰述された。このとき、淳和天皇は各宗に勅を下し、それぞれの宗義の要旨をまとめた法文を撰述して進上せしめた。

元興寺の護命（法相宗）が『大乘法相研神章』五巻を、東大寺の普機（華嚴宗）は『華嚴宗一乘開心論』六巻を、比叡山の義真（天台宗）が『天台法華宗義集』一巻を、大安寺の玄叡（三論宗）は『大乘三論大義鈔』四巻、唐招提寺の豊安（律宗）は『戒律伝来記』三巻を著している。これに真言宗の空海が撰述した『秘密曼荼羅十住心論』一〇巻を合わせて、六本宗書と呼ぶ。

『秘密曼荼羅十住心論』は、『弁頭密二教論』の横の教判に対し、豎の教判を説く。人のこのころの展開には種々の階層があるとはいえ、本質的にはすべて仏心の顕れであると観る。そして、それぞれの住心の階位が道徳に目覚める前の段階から、仏教以外の宗教、仏教の各宗に配せられ、それぞれの段階の教義を説示する文言の意味の深みに、すべて密意を見出すことで、各々の宗教、宗派が相互に主体足りうることが明らかにされる。それぞれに深秘釈が施されているところに最大の特徴があるといえるであろう。一〇段階の住心は以下のとおりである。

（第一住心）異生羝羊住心：禽獣の如きこのころの段階。食と性欲の盛んな羊の如く、本能に支配され、欲望の意味も、それを調整する術も知らぬ、倫理道徳以前のこのころの状態。

（第二住心）愚童持斎住心：愚かな少年のこのころも、導く者があれば自らを慎み、他に施すところが起きる。本来具有の仏心が芽生え、倫理道徳の道を行おうとするこのころの状態。

（第三住心）婴童無畏住心：人間界の苦悩を厭って天上の楽果を求める外教徒に見られる宗教的心境。ちょうど幼児が母の懷にいる間は世間の苦しみを知らず、犢が母に従って安全なのと同様である。

以上は「世間の三住心」と呼ばれる。仏教以前の日常生活におけるこのころの階梯の三段階を示すものである。

（第四住心）唯蘊無我住心：事物の本質は存在せず、人も万物も仮の存在を保つ、という仏教的認識の第一段階のころ。声聞乗がこれに当たる。

（第五住心）拔業因種住心：よく事物の生起・連関の法則を知り、迷いのもと、業の原因・種子を抜く境地であるが、利他の慈悲はない。縁覚乗がこれに当たる。

第四、第五住心を「二乗」と呼ぶ。声聞・縁覚の仏教の二つのこのころの段階だからである。

（第六住心）他縁大乘住心：すべての衆生を救うことを目的とする大乘仏教の最初の段階。もの（法）の本質（性）とその顕現（相）とを観る法相宗がこれに当たる。

（第七住心）覺心不生住心：ここは何ものによっても生じたのではなく、すべての相対的判断を否定し、このころの原点に立ち返って空寂の自由の境地「中道」に入ることを目指す。三論宗の境地。

（第八住心）一道無為住心：万物は真実そのものであり、本来清浄なものである。この境地に入るとき、従来の教えは一道もしくは仏の一乗に帰す。法華・天台の境地。

（第九住心）極無自性住心：世界には一つとして固定的本性はなく、すべてがそのまま真実そのものである。「法界縁起」、すなわち、真如そのものが現実へ展開すると観る華嚴宗の境地。

第六から第九までの法相宗・三論宗・天台宗・華嚴宗の四つの住心を「四家（四箇）の大乘」と呼ぶ。

（第十住心）秘密莊嚴住心：色心不二・物心一如の根源的實在たる法身自内証を体験し、開顯する果分・表徳の境地。言語・分別を超えた境地であるために「秘密」といい、整然と配置されているので「莊嚴」と喩える。

これら十住心は、このころの深淺優劣を配列して、その発展過程（心品転昇）を示すとともに、真言の立場に立てば、すべての住心に真言の主旨は生きてくるのであるから、万物肯定の書でもある。

『秘密曼荼羅十住心論』が、九頭十密、すなわち、九つの頭教のすべてに密が生きて十の密教と説く。すなわち、浅略釈では九頭、深秘釈では十密と説くのに対し、略論といわれる『秘蔵宝鑰』では第九住心までは頭教、密教は第十

住心のみと説く。後者は、最上位に密教を置き、それ以外は顕教(密教に非ず)と説くのに対し、前者では、つまるところ第十住心である真言密教が、第九住心までのすべての顕教を包摂し、見方を変えればすべてが密教なのだと説くのである。真に壮大なスケールを有した考え方であり、「低次元より高次元へと進む人間精神の向上的發展を説いたものであると同時に、人類思想史を鳥瞰したもの」<sup>22</sup>という評が正鵠を得ていると得心させられる次第である。また、十住心論体系を交響楽になぞらえて、空海を「宇宙生命交響楽の名指揮者」<sup>23</sup>と例える一文は正に当意即妙の表現であり、説得力に溢れている。

#### 四. 事績への私見

(綜藝種智院開創と満濃池修築を中心として)

「序」において、「空海は情熱と行動の人である。」と位置付けた。明晰な頭脳や思考力も、探究心・向学心に目覚め、空海自身が『三教指帰』の序において、「雪螢を猶怠るに拉ぎ、縄錐の勤めざるに怒る。」<sup>24</sup>と記したように、たぎるような情熱が源泉となって、己を鞭打ち、熱意をもって刻苦勉励した結果である。願いを叶えるために、行動を起こすことができるか否か。大きな果実を得るために、小さな種を植え、それを丹精込めて育て上げるという継続的な行動力を維持し得るか。それが成否を分ける重要な因子である。

延暦二三(八〇四)年、当時の航海術では命懸けであった遣唐使派遣の一行に名を連ねた発端も、「性熏我を勧めて、源に還るを思と為す。径路未だ知らず。岐に臨んで、幾たびか泣す。精誠感有つて此の秘門を得たり。文に臨むも心昏し。願つて赤県を尋ぬ。」<sup>25</sup>すなわち、仏道を極めんと強く願ったが、選択肢に迷い幾たびとなく涙を流し、願いが叶って真言の教えに巡り会えたものの、納得のいく理解が得られないため入唐求法の旅に臨んだ、というのであるから、空海の内に秘めた熱情と、思い込んだらいかなる試練も厭わない強靱な意志、そして、願いを達成するまでの粘り強い行動力の発露であると言えよう。

しかも、徒手空拳で唐都長安に乗り込んだにも拘らず、一路、密教付法の第七祖恵果阿闍梨を訪れるのではなく、法灯を継ぐに不可欠な梵語を、般若三蔵等の婆羅門僧から習得し、準備万端整えてから伺候するという周到さ・冷静さをも持ち合わせている。「情熱と行動」というと、脇目も振らずに猪突猛進する様を思い起こさせられるが、空海には目的を果たすために最も効果的な計画を立てる緻密さと、一度決めたらとことんやり抜く、岩をも砕く固い信念、そして一気呵成の実行力が兼ね備わっていたと言えよう。

空海の事績は、いずれも「情熱と行動」に貫かれていると考えるが、ここでは特に、讃岐満濃池の修築と綜藝種智院の創設という二つの社会事業について論及する。

#### 【満濃池の修築】

満濃池は、現在の香川県仲多度郡満濃町に所在する日本最大の灌漑用溜池で、文武天皇の大寶年間(七〇一～七〇三年)に讃岐国の国守、道守朝臣により創築された。讃岐国、香川県は、瀬戸内海気候帯に属し、温暖ではあるが降水量が極めて少なく、また、大きな河川もないため、生活用水・農業用水の確保には溜池の開鑿と維持は、古くから近隣住民にとって死活問題であった。満濃池は四方を山に囲まれ、山内三六谷の水の集積地と言われ、豊富な水量を誇る「丸亀平野の水瓶」であるが、その水量が仇となり度重なる堤防決壊を起こしていた。特に弘仁九(八一八)年の決壊は壊滅的で、大量の汚泥が周辺地域に流出し、周辺地域の田畑に甚大な被害をもたらし、住民の暮らしも困窮した。朝廷の築池使、路真人浜継が復旧に着手したが、技術的困難と人手不足により難航した。見兼ねた讃岐国の国司清原夏野から空海を工事監督として招請する願文が朝廷に寄せられ、弘仁一二(八二一)年五月二七日、これに対して太政官符が下されている。こうして、空海は讃岐国満濃池の修築別当に任じられ、生まれ故郷の讃岐に向かう。その様を『日本紀略』は「百姓、(空海を)慕うこと父母の如し。もし師来ると聞かば、必ず履を倒にして相迎せん。」と記している。同年九月、空海が着手してからわずか三箇月にして修築は完成する。その要因としては、先の『日本紀略』の記述にも窺えるように、地元民衆が空海を肉親のように慕い、多くの労働力が集まったことに加え、空海が唐への留学時代に身に付けたと思しき最新の土木工学、建築設計術が遺憾なく発揮されたことが挙げられる。空海の万能の天才ぶりが遺憾なく発揮された事績である。

現代建築学の観点から空海の満濃池修築を想定復元した試み<sup>26</sup>によると、少なくとも以下の三点に空海の創意が見られるという。

- (一) アーチ式堰堤の創始：築堤の位置を谷の最狭部から上流側へずらし、水压を考慮してアーチ状に湾曲した形態を採用した。
- (二) 余水吐きの創始：洪水対策として、池が満水になる前に水の一部を外部に

逃がし、堤防の決壊を防止した。

- (三) 水たたきの設置：護岸設備として水際に木杭を打ち並べ、堰堤の土砂が水流に掘削され流出・崩壊することを防いだ。

これらの技術は、現代のダム工法でも採用される技術で、九世紀日本において、かような高等技術を駆使した治水事業が行われていた事実には驚嘆させられる。ピラミッドや万里の長城などの古代巨大建造物が抜群の知名度を誇るものの、所詮は権力者層の示威のための墳墓であり、夷狄侵入を防ぐための防御壁であったことを想うとき、空海が修築した満濃池は規模こそそれら巨大建造物に及ばぬものの、周辺に暮らす人々の生活の安定を目的としていた点で、もっと顕彰されても良いと感じるのは私だけであろうか。

満濃池のほとりに、大正・昭和期の歌人吉井勇の“水ならで 慈悲のこころを たたえたり 大師の池は ありがたきかも”の歌碑が建立され、空海の満濃池修築の偉業を讃えている。空海による修築後も、満濃池は江戸寛永年間、明治初期、昭和の第二次世界大戦前後に大規模な改修工事が行われているが、いずれの時期の改修工事においても空海が施した築造技術が原型となっており、その功績は計り知れぬほど大きい。

#### 【綜藝種智院の開創】

天長五（八二八）年一二月一五日、空海は京左九条の東寺に隣接する藤原三守邸の提供を受け、綜藝種智院を開設する。それに関連して撰述された「綜藝種智院式并序」には、空海教育理念が余すところなく綴られており、その特徴を列記するならば、次の四点に集約される。

- (一) 環境の選択（静謐にして豊かな自然にも恵まれ、心身の鍛錬・修行に相応しい環境を整えること。）  
(二) 教育の機会均等（地位・身分に関係なく、学ぶ意志のある者に広く門戸を開くこと。）  
(三) 総合教育志向（高い資質を持つ教師陣による三教に及ぶ総合的・全人的教育の実施すること。）  
(四) 完全給費制（教師と生徒に経済的保証

を与え、学問に専念させること。）

これらは現代でも充分に通用する勇壮な教育理念であり、この理念に基づいて開創された綜藝種智院は、総合私立大学の嚆矢ともいえるべき存在で、欧州における総合大学（ユニバーシティ）の設立が十一世紀であることから、それを遡ること二世紀も前に、極東の島国に総合私学が開設されていた事実は、教育史上にも特筆されるべき画期的な出来事であると評価されよう。

残念ながら綜藝種智院は、余りも高邁過ぎた建学理念を継続できずに、空海没後一八年で閉鎖を余儀なくされるが、その衣鉢を継ぐ高野山大学に就学し、研鑽を積めたことは、私にとっての矜持でもある。

私自身、次世代を担う人材育成を企図して、インターナショナルスクールの開設準備を進めているが、その件については、第三章 三. で詳述する。

## 第二章 空海思想と「理念経営」

### 一、「理念経営」総説

私たちが信じているこの“現実”は、実はこころの中にあり、現実とはこころが創り出した想念を現象として反映した世界に過ぎない、実体のないものと私は考えている。ゆえに、現実そのものがこころの世界であり、こころに信念を持って想うことが現実として目の前に顕れてくると信じるようになったのである。

真言には、にわかには感得できない精妙な働きがある。一つひとつの言葉を完全に説明し尽くすことは難行であるけれども、確かに真言には甚大な如来の功德と法力が内包され顕現している。同じように、私の“想起して、信念をもって行動すれば、想念は必ず現実となる。”という想いは、文字で説明することが困難である。私が事業活動等を媒体として成し遂げてきた、または、これから成し遂げていく実践行を通じて具現化していく方法を持つてのみ、社会に感得されうる想念であろう。この点に関しては、私の生き方の発露でもあり、口述試問において詳述したいと考える。

宇宙の生成は、今からおよそ一三七億年前に遡ることができるという。私たちが暮らす地球は、太陽という恒星を中心とした太陽系に属する惑星の一つである。マクロの視点で宇宙を見渡すと、数百億から数千億個の恒星や星間物質が重力的にまとまって銀河(小宇宙)を構成し、銀河同士が相互の重力によって銀河群や銀河団を構成している。また、銀河群や銀河団が集まって一億光年以上の広がりを持つ構造を超銀河団と呼び、これが宇宙において形成される最大の構造群となる。

一方で、視点をミクロに切り替えると、物質は元素によって構成され、元素は素粒子によって構成されている。現代の宇宙物理学・天体物理学で宇宙誕生の定説となっているビッグバン理論では、量子論の概念を導入して、無から宇宙が生まれたという結論を導き出している。事実、何もない真空の中で、突然、電子や陽電子などの粒子が、出現したり、消滅したりする現象が確認されており、その電子や陽電子は、出現後放置すると、すぐに消滅して無に帰するが、

消えてしまう直前に強いエネルギーを与えると、そのまま存在し続けるのである。つまり、何もないところから、実際に存在する物質が出現し、これが宇宙の「始点」となったと説くのである。

限りなく膨張を続け、無数ともいえる元素や素粒子で構成される宇宙は、その創生時に遡れば、極限的に無に近い一点に集約されるのである。現在、宇宙に満ちている膨大なエネルギー、時間、物質存在の全てが、元を辿ればただ一点に収斂されるという真実に想いを馳せるとき、この世に存在する森羅万象、あらゆる存在・非存在、時間や空間、概念や情報も、全てが連関融和して渾然一体となり、些細な拘りや焦りや気の迷いは刹那に解消され、前に進もうという気概が湧いてくるのである。

さて、現実を見つめてみると、私は企業トップというポジションにあるが、今でも深夜になると、「この辺で仕事を中断しよう」とか、「疲れたからそろそろ休もう」といった弱いところが頭をもたげることがある。けれども、それに対し「自分は日々、こころを鍛える修行をしているのだ」と思うと、強いエネルギーが湧き出てきて弱いところを打ち消して、一歩前へ進むことができる。行動を起こすことによって、その結果が企業発展という形で現れてくるのである。

言い換えると、経営者としての私のこころの持ち方、つまりは“理念”が、現実の企業経営を左右しているといっても過言ではあるまい。

ここで、私が経営する新日本科学の企業理念について紹介する。

まず、会社の使命として、「創薬と医療技術の向上を支援し、人類を苦痛から解放する事を絶対的な使命とする」という企業ミッションを制定した。

基本的に企業の目的は、大局的な視点から制定することが肝要であるが、同時に神聖で、かつ、人類にとって永遠の価値と真理を追求するものでなければならない。手が届きそうにない壮大な目標を掲げ、一歩ずつでも達成に向けて日々の努力を積み重ねていくことで、企業の存続意義が長く保たれ、企業の生命もそれだけ永らえるのではないかと考えている。

「創薬と医療技術の向上の支援」は、事業の焦点を健康産業の領域に絞り込むということであ

あり、「人類を苦痛から解放する」は、常に疾病やケガに苦しむ人々を念頭に置き、日々の業務にこころを込めて、誠心誠意完遂することを使命として掲げたものである。

また、私は、「会社は組織であり、組織は人材から成り立っているので、社員が成長できる職場環境を整備することが経営者の主たる役割である」と考えており、この考え方が私の組織論の根幹を形成している。すなわち、会社は生き物であるということである。

社員が成長できない、あるいは成長できる環境が整っていない職場は、組織が不安定で、ポジション争いによる内乱があり、社員は幸福を実感することができない。その結果、本来企業が目的とするところの“社会貢献”を果たすこともできないのである。このような状況では企業は成長できるはずがない。存続も危ぶまれる。

企業による社会貢献にもさまざまな形があるが、私は、社会に「利益を還元する」ことがとても大事であると考えている。なぜならば、企業は“社会に生かされて”存在している結果として、事業活動を営むことができ、利益が生まれるのであり、経済的利益と社会的利益のバランスを取って、事業活動の継続に必要な経済的利益を確保しつつ、可能な限り社会的利益を広く還元し、社会に貢献し続けることが企業の本質的な社会的役割であると信じているからである。

さらに、私は、企業経営者の一人として「自分が何のために仕事をしているのか?」、さらにはもっと本質的なテーマとして、「自分は何のために生きているのか、何を目的として存在しているのか?」という人生哲学を社員一人ひとりにしっかりと認識してもらうことこそが、理念経営の出発点と考えている。

そして、社員が日常の業務の中で、組織人として物事を正しく判断するために、こころの中にしっかりとした、正しい判断軸である「理念」を育んでくれることを常に願っている。

以下に、新日本科学の全職員がこころの判断軸として、潜在意識レベルにまで刷り込むこと、無意識のうちに行動に反映されることを目指して制定した「理念」、「倫理綱領」、「倫理綱領五ヶ条」、「誓言十二ヶ条」を掲げる。新日本科学の一員として、日々の営みの中で一切の思考、一切の言語、一切の行いがこれらに則ったもの

になるべく浸透に努めている。いわば、新日本科学の「無相の三密」ともいうべき存在である。

#### 【理念】

環境：青い空、青い海、素晴らしい「地球」。

美しい「環境」を永遠に保とう。

生命：かけがえのない「生命」。大切な「命」に畏敬の念を持ち続けよう。

人材：社会の財産は「人材」。ヒトが人材であるために必要な「こころ」を大切にしよう。

#### 【倫理綱領】

私達は、憲法を支持し、法令を厳守し、社会規範を尊重し、知的な紳士・淑女として社会の模範となることを強く意識して行動します。

#### 【倫理綱領五ヶ条】

- 一、私は、良識のある大人の社会人と言われる言動を約束します。
- 二、私は、帰属する組織の名誉を代表していることを認識しています。
- 三、私は、いかなるときも企業理念と倫理綱領に立脚した行動をとります。
- 四、私は、業務上で知り得た個人と企業の秘密保持を厳守します。
- 五、私は、不正行為が罰せられる前に自らそれを罰する勇気を持ちます。

#### 【行動指針五ヶ条】

- 一、私は、即実行する社員です。
- 二、私は、誠心誠意尽くす社員です。
- 三、私は、真実を伝える社員です。
- 四、私は、先見性を持つ社員です。
- 五、私は、仕事に誇りと責任を持つ社員です。

#### 【誓言十二ヶ条】

- 一、私達は、地球の環境保全に参画しています。(環境保全)
- 二、私達は、何よりも命に敬意を払います。(生命の尊厳)
- 三、私達は、人類の健康回復を支援しています。(創薬支援)
- 四、私達は、人類の健康増進を応援しています。(健康増進)

- 五、私達は、人類の医療向上に寄与しています。(医療向上)
- 六、私達は、人類の疾病予防に挑戦しています。(予防衛生)
- 七、私達は、絶対的な安全を追求しています。(人権保全)
- 八、私達は、研究の安全基準を遵守しています。(法令厳守)
- 九、私達は、積極的に協働しています。(仕事の姿勢)
- 十、私達は、確実性を大切にしています。(評価の基準)
- 十一、私達は、仕事ともに成長しています。(成長志向)
- 十二、私達は、人類の幸福に貢献しています。(仕事の目的)

ごく当たり前のことばかりであるが、当たり前のこと、当然のことを当然のごとく為し続けることは難しい。功德のある経典を常に読誦してご利益に預かるように、新日本科学の役職員は、日々、「理念」、「使命」、「倫理綱領」、「倫理綱領五ヶ条」、「誓言十二ヶ条」を唱和し、念持して事業活動に邁進している。

以下に掲げるのは、私が自分に課した「経営理念」である。もちろん、社員一人ひとりにも経営者感覚を持って日常の業務に当たってもらいたいので公開はしているが、まずは会社の筆頭である私が、以下の理念を日々実践している姿を社員と社会に示すことで、率先垂範できるように努めている。

#### 【経営理念】

- 会社と社員が共に成長する職場であり続ける。
- 一、私は、大欲を持って事業を行います。
  - 二、私は、社会に貢献する組織作りに努めます。
  - 三、私は、利益を社会と株主に還元できる経営を行います。
  - 四、私は、新規事業のリスクを恐れず、勝利するまで挑戦し続けます。
  - 五、私は、経営方針を明確に示し、全社員に共通の目的意識を持たせます。
  - 六、私は、明確な指揮命令系統と機動力のある柔軟な組織を創ります。

- 七、私は、ガラス張りの経営を行い、情報の共有化ができる職場環境を創ります。
- 八、私は、経営者マインドと卓越した能力を持つリーダーを養成します。
- 九、私は、いかなる困難があっても、事業の自己責任を完遂します。
- 十、私は、自らレセプターの感受性を高め、自己実現を達成します。
- 十一、私は、顧客とところのシンクロナイズを徹底して維持します。
- 十二、私は、人類の健康・保健・医療に貢献する企業を目指します。

この十二カ条を愚直に実践していくことこそが、事業活動を通じて、企業価値の向上と社会貢献の実現に直結しているものと確信して、企業経営における「無相の三密」に取り組んでいる次第である。

## 二. 教相判釈と企業ブランド力について

教相判釈とは、諸經典を釈尊一代に説かれたものと考え、その諸經典の諸説が多岐に渡っているので、説かれた形式、方法、順序、意味内容、教義内容等によって種々の經典を分類し、体系づけて、価値づけをし、仏の真の意図を明らかにしようとする試みである。

弘法大師空海は、『弁顯密二教論』において横の教判（顯密二教判）、『秘密曼荼羅十住心論』において豎の教判（十住心教判）を説かれた。

『弁顯密二教論』において、顯教と密教の教義上の明確な区別を解明し、法身仏が説くのが密教、報身仏・応身仏が説くのが顯教とした。迷いの立場からは、法身は永遠不滅の真理の体で、それ自体説法せず、報身・応身となって説法するというのが顯教の見解である。これでは、法身は真如の理体であって説法もなく、活動もなく、否定的表現を用いるほかはなく、法身の実義を明かすことはできない。法身自体からすれば、法身こそ常に煌々たる光を放ち、大宇宙の悉くが法身の説法である。空海の説を詳述すると、以下のとおりとなる。

- (一) 能説の仏心：顯教では、報身、応身の仏によって説法が行われ、法身は真理であるから説法はしないと観るが、密教では宇宙の真理に目覚めたものは、現実世界全てが絶対の真理であり、その働きが法身大日如来の説法であると考え。
- (二) 所説の教法：顯教では現実の世界について説くことができるが、絶対の世界は言語や文字を超えた体験の境地であるから説くことができないとする。密教では特定の言語、文字、印契などを象徴として可能であると説く。
- (三) 成仏の遅速：顯教では三大阿僧祇劫という無限とも言える長い歳月の菩薩行を積まなければ成仏できないとされるが、密教では、この身このままで成仏が叶うと説く。
- (四) 教益の勝劣：顯教では救われない者も、密教では陀羅尼の功德によって速やかに救われると説く。

また、『秘密曼荼羅十住心論』では、全人間

の精神段階を、一〇種の深淺次第に分類し、古今の全宗教をこの一〇の階梯に配当した豎の教判を展開された。

私は平成九（一九九七）年に、会社の最高経営責任者CEOに就任してから、事業の垂直展開と水平展開を同時に推進してきた。すなわち、事業領域の拡大（垂直展開）と、事業の国際展開（水平展開）である。

当社の起源は、昭和三二（一九五七）年に私の父が創業した動物病院に遡る。その数年後から現在の基盤事業である前臨床試験受託事業を主軸に据えて事業を営んできた。前臨床試験とは、医薬品開発の初期段階で実施する実験動物を用いる医薬品候補物質の安全性と有効性を調べる試験のことを言う。新薬開発においては、その安全性と有効性をまず前臨床試験で確認し、それからヒトで確認する臨床試験の実施が義務づけられている。当社は、私が入社した昭和五八（一九八三）年には前臨床試験受託事業のみ行っていたが、その後、臨床分野への進出という私の強い希望を実現すべく、父の反対を押し切り、平成五（一九九三）年に臨床第Ⅰ相試験事業に進出した。当時、すでに父は会長職として第一線から退いていたものの、代表権を持っており、反対を押し切るには明確な理由が必要であった。私は、医薬品の開発は、今後は国境を越えてグローバルな展開となり、さらに競争が激化してくること、事業を顧客の視点から考えると一環として研究を受託できる体制の構築が急務であることを訴えた。今になって考えてみると、父親は獣医師であり、長年にわたり実験動物の分野で仕事をしてきたが、私が医師として臨床分野に進出することに対して、それまでの経験から予測できない不安と自分から遠ざかっていく寂しさを感じていたのではないだろうかと推察している。平成九（一九九七）年、父親は満七〇歳を向かえると引退宣言をして、翌日から会社にもまったく出てこなくなった。海軍特攻隊の生き残りとして、戦後、この家業に命を懸けてきた四〇年間だったのであろうが、引き際は見事であった。それから、私は、事業の垂直展開を目指して、薬物動態・分析受託事業、臨床第Ⅱ・Ⅲ相試験事業、治験施設支援事業と着々と事業領域を拡大すると同時に、アメリカや中国に施設を建設してグローバル化

ョンを進め、この一〇年間、めまぐるしいほどのスピードで事業展開して来た。それは、まるでそれまで抑圧されてきたエネルギーが一気に吹き出たような感じであったが、私自身はすべきことを企業理念に基づき実行してきたまでと、思っている。

まず、平成一〇（一九九八）年に和歌山県海南市に薬物分析センターを建築した。これまで、動物実験という生体を利用する研究から試験内での研究を強化したことになる。血液や尿に含まれる薬物の微量な濃度を測定する技術が特徴である。一ミリリットルの血液に含まれる一〇億分の一ミリグラムの薬物を測定できる世界最先端の技術を導入した。海外では、米国ワシントン州シアトル市郊外において、平成一一（一九九九）年に前臨床試験の受託機関 SNBL U. S. A., Ltd. を開設した。アメリカは、日本の一〇倍以上と言われる創・製薬市場の規模の大きさがある。当社が半世紀に亘って築き上げてきた医薬品開発受託研究の経験とノウハウを背景に、厳格さにおいて世界的にも有名な米国の諸基準・規制の認定をすべて取得した。開設後ほぼ毎年のように施設の拡張工事が必要なほど順調に受託実績を積み上げ、現在では、国内の安全性研究所（鹿児島市）を凌駕する売上規模と受注残高を計上するまでに成長を遂げた。平成一九（二〇〇七）年には、テキサス州アリスに敷地面積約六三万坪を擁する霊長類の検疫施設と飼育施設となる SNBL U. S. A., Ltd. Scientific Resource Center を開設した。これにより、SNBL U. S. A., Ltd. の試験効率はさらに向上するものと見込んでいる。

臨床分野では、平成一一（一九九九）年に東京と大阪に臨床試験の第Ⅱ相と第Ⅲ相試験を受託する臨床開発本部を設置し、事業の垂直展開を行った。アメリカにも、メリーランド州立大学ボルチモア校キャンパス内に SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc. (SNBL CPC, Inc.) を平成一七（二〇〇五）年に開設し、海外での臨床試験の受託事業にも進出した。SNBL CPC, Inc. は、ベッド数九六床を有する北米でも有数の規模の治験専門病院で、特殊心電図QTの精査も可能な最新鋭の機器を配備している。さらに、ハーバード大学との合併事業として、Ruika Therapeutics, Inc. を平成一九（二〇〇七）年

に設立し、同大学が有する特許の事業化権を取得し、知的財産権を活用した新たな事業にも着手している。その事業化の第一弾として、うつ病患者に対して薬物治療後の効果が発現するまでの期間を飛躍的に短縮できる新薬及びそれを用いた新たな治療法の開発を手掛けている。

中国では、平成一五（二〇〇三）年、広東省高要市に霊長類の繁殖・検疫・輸出事業を行う目的で肇慶創薬生物科技有限公司を、平成一九（二〇〇七）年に浙江省嘉興市（上海郊外）に環境分析機器販売と分析試験受託を目的として、美西生物科技（上海）有限公司をそれぞれ開設し、米国を凌ぐ潜在的な医薬品需要が見込まれる中国市場の取り込みを企図して事業展開を図っている。

また、その他のアジア地域では、霊長類の安定供給の実現を目的として、平成一七（二〇〇五）年、カンボジア王国に SNBL Cambodia, Ltd. を設立し、現在では三万匹に迫る霊長類の収容能力を有する供給拠点となった。インドにも、平成一九（二〇〇七）年、昨今経済都市として名高いカルナタカ州バンガロールに SNBL India Private, Ltd. を設立した。当面、米国とインドとの時差を利用して、SNBL U. S. A., Ltd. が実施した試験結果を、SNBL India Private, Ltd. が米国時間の夜間にデータ処理をして、翌朝には米国に送信するというビジネスモデルを構築し、将来的には当社グループ各社及び外部の顧客にもサービス提供の範囲を広げていく計画である。

これらにより、新日本科学グループは「二四時間稼動する受託研究機関」として、企業価値を高め、対外的に更なる利便性と迅速性を提供することが可能になるのである。

一方、製薬企業から仕事を請け負う受託研究分野だけでは将来の発展性に限りがあると予測し、当社でも自社製の医薬品を開発すべきであると考え、平成一〇（一九九八）年には、創薬研究の領域にも着手した。これは、国内・海外の有名大学やバイオベンチャーといわれる創薬型企業における基礎研究から派生してくる有望な技術や新規物質を発掘して、医薬品としての評価・承認に必要な前臨床試験や臨床試験を共同で行うという事業である。基礎理論を臨床の場で実証することにより付加価値を高めて事業化へつなげていくトランスレーショナルリサー

チ事業として位置付けているが、これは私が最初に提唱した新しいビジネスモデルでもある。自社の強みを生かして、他社の弱みを補完し、お互いに目標を共有するという考え方に基づいている。これは、密教にある他者を囲い込み、自らの中に取り込むという戦略を意図している。

トランスレーショナルリサーチ事業は、現在、株式会社新日本科学の連結子会社である Translational Research 株式会社と株式会社バイオアクティスを中心に、経鼻投与技術の開発が佳境を迎えている。これは、経口投与や注射投与が困難・煩雑な制吐剤や鎮痛剤、糖尿病薬、偏頭痛薬等を、当社グループが独自に開発した製剤と医療用具を用いて鼻から投与し、鼻粘膜において吸収させ、薬効を発現させるという仕組みである。すでに制吐剤（グラニセトロン）は、米国における臨床第Ⅰ相試験が完了しており、ほぼ一〇〇%に近い生物学的利用率が得られ、経口剤と比較して高い吸収率が示されるとともに、耳鼻咽喉科専門医による鼻粘膜検査でも粘膜刺激性を示唆する所見は観察されず、高い安全性が確認されている。これらの薬の経鼻剤開発は、さまざまな疾病の症状に苦しむ患者を、より早く、より安全に、より確実かつ簡便に苦痛から解放する取り組みであり、当社グループの企業使命にも合致する菩薩行であると位置付けている。

こうした事業領域の拡大により、創薬から臨床までの新薬開発プロセスを網羅的に受託できる価値連鎖（バリューチェーン）を確立し、顧客にワンストップショッピングの利便性を提供できる体制が構築された。国際化・大型化・複雑化の一途を辿る医薬品開発に対応すべく、米国、欧州、アジアの各主要拠点において立ち上げて現地法人は、将来に大きな布石となり、グローバルな視点での事業展開の実践へと繋がった。このように、事業領域の拡大（垂直展開）と、事業の国際展開（水平展開）を推進することによって、他社との圧倒的な差別化を図り、競争優位性を確立し、新日本科学のブランド構築、企業価値の向上が実現できたのである。

### 三. 十住心論に見られる心品転昇と 企業の発展について

世の中にはさまざまな人間がいる。人種、性別、信条、社会的身分、経歴、その他種々の要素の組み合わせにより個体の特性（個性）が決定される。その組み合わせは人の数だけ存在し、まったく同一の組み合わせは存在しない。「十人十色」とは、このことを指す。

企業においては、所属する構成員の個々の特性を尊重し、強いところを伸ばし、弱いところは補完していくことが必要となる。

また、企業や団体、組織は、本来的に各々存在意義（使命）を有していなければならないので、それぞれに所属する構成員は、企業や組織が目指す方向性とベクトルを同一にしなければならない。これは、必ずしも個人の思想信条を集団が規制する、あるいは拘束・抑圧するということではない。社会貢献と人類の幸福に資する事業活動に参画する人間は、少なくとも、その根底に存在する「理念」を共有していなければならない、ということである。

組織や社会においても『秘密曼荼羅十住心論』で説かれたこころの階梯が実在すると思われる。私は、これまでの事業経営において、国内外の自社の従業員や諸々の外部関係者など数多くの人々と接してきたが、その中から、何らかの形で「働くこと」、すなわち、「仕事」に関わる人が辿る成長・変化の軌跡があると考え、それを現実的な視点から段階的にまとめたものを以下に記す。

- (一段階) 倫理観が未成熟で感情が先立ち、自己抑制ができず、反社会的な言動を発してしまう。
- (二段階) 仕事を生活（金銭）のための手段と考え、与えられた仕事だけを単にこなす日々を過ごす。
- (三段階) 仕事を通じての成功体験の積み重ねが、昇給や昇格に結びつくと感じ、自己の成長・栄達に熱心ではあるが、他者への関心・協調性がない。
- (四段階) 他者との関連性が芽生え、協調の大切さはわかりつつあるが、自我

が強く、積極的に組織に関与しようとはしない。いわゆる批評家・評論家の段階。

- (五段階) 成長志向が進み、尊敬すべき上司、目指すべき先輩などの模倣を通じて、自己のスタイルを確立し始める。また、社会・組織の一員としての自覚が芽生え、集団・組織の中で自分の役割を完遂することに喜びや達成感を見出す。
- (六段階) 自己の成長の積み重ねがチームワーク・チームの成果につながるものが理解でき、組織や社会の発展に結びつくことに気づく。同僚・部下・後輩の指導育成にも注力する。
- (七段階) 金銭や物質の獲得などよりも、家族や仲間からの賞賛や感謝など無形の褒美に大きな価値観を見出し、「無私」の精神が芽生える。
- (八段階) 自分は、「社会に生かされて生きている」ことを自覚し、積極的に社会に関与し、社会貢献や公益性を強く意識して菩薩行を積み始める。
- (九段階) 所属する組織・団体・業界の枠を超えて、さまざまな依頼・要請・誓願が寄せられる。報酬や見返りを求めずに、損得抜きで己の信ずる道を進み、それが社会のためになる。
- (十段階) 日常の行住坐臥が無意識のうちに菩薩行（社会貢献・公益活動）となり、社会にとってなくてはならない存在となる。自然に発する声・言葉と慈悲の眼差し、微笑で人々は活力を獲得することができ、そして、会うだけで人々を幸せに導く。

(一) から (十) の階梯は、全ての段階を、順を追って昇り詰めていくものではない。

(七) ・ (八) などの高次の段階まで到達しつつも、ふとした気の緩みから不正や犯罪行為に手を染めてしまい、社会から退場を余儀なくさ

れるケースもある。逆に派遣やパートの身であっても、(五)・(六)の段階に差し掛かっている人が存在していることも事実である。

要するに、こころの階梯は、実年齢の高低や社会人経験の深浅で決定づけられるのではなく、個人のこころの持ちようと、周囲の理解・協力（個人の成長を支援する体制）によって左右されるということである。

以下、各段階を略述する。(一)は犯罪予備軍ともいうべきで、組織や集団には危険な存在である。積極的に社会が手を差し伸べて更正施設等において社会で生きていくルールを教え込まなければならない。(二)～(四)は一般的な社員のレベルであり、八割がここに相当し、社会人として間もない頃から十年目くらいまでの模索期の社員に多い。(五)は中堅社員・中間管理職クラスのレベルであるが、若くしてこの段階にある社員は、短期間での成長が著しい人材が多い。(六)は幹部職員のレベルである。(七)は経営幹部や取締役レベルであるが、数値達成目標が重く押し掛け、理念が揺らいでしまうこころの饒舌に惑わされる時期でもある。(八)は企業トップのレベルである。三業を継続できれば企業は大きく成長できる。(九)は偉大な経営者レベル。すでに、経営する企業は大企業となり、社会に大きく貢献している。(十)になると、もはや聖人高徳の経営士ともいうべき存在で、多くの経営者の憧れの的である。私は、(十)の段階を人生の最終目的として目指し、到達したいと願って日々事業活動に携わっている。

再述となるが、これらの段階は全ての人が順を追って各段階を必ず経て成長していくものではない。初めから比較的高次のレベルにいる人もいれば、いつまで経っても低いレベルから成長できない人もいる。逆に高次の段階から下降してしまう人もいる。私の身の回りにいる全ての人には、ある段階から下降することなく、順調にこれらの階梯を昇って（成長して）いてもらいたいと願っている。そのためには、第二章 二. で述べた「理念経営」が不可欠になってくるのである。

### 第三章 大欲の実践

#### 一、「メディポリス指宿」事業について

医療を通じて衆生救済、社会貢献に資するために私が全身全霊で取り組んでいるのが、総合医療都市『メディポリス指宿』の構築である。

『メディポリス指宿』プロジェクトは、「南九州から“光”を放つ医療」をモットーに、鹿児島県、鹿児島県医師会、指宿市、指宿医師会、地元の民間企業等に加えて、鹿児島大学等との協働を視野に入れた産・官・学連携体制のもと、平成二三（二〇一一）年四月の全面開業に向け、現在も着々と構築が進められている。

深刻化しつつある生活習慣病の蔓延、加速する超高齢化社会を背景として、健康に対する関心は年々高まりつつある。

このような環境のもと、行政、医療機関や研究機関、企業・団体等がそれぞれに健康に寄与する活動を行っているが、『メディポリス指宿』構想では、健康に関わる医療、研究、産業の分野を包括的に取り組み、健康への強い社会的ニーズに総合的に応えることができる医療産業都市の構築を目指している。

その舞台となる『メディポリス指宿』は、総敷地面積が一〇三万坪（東京ドーム約七七個分）という壮大な規模を有しており、風光明媚な景観と豊かな大自然に恵まれた施設である。

具体的には、「予防医学」、「高度先端医療」、「こころのケア」、「創薬研究」の四つの分野を柱とし、それぞれの分野で活動の中心となるセンターを順次開設していく予定である。

「予防医学」の分野では、医療行為を行う中核として開設された財団法人メディポリス医学研究財団 附属医院が平成一九（二〇〇七）年六月から既に診療を開始している。この医院は、

- （一）自己治癒力を癒しの原点に置き、そのプロセスをサポートする。
- （二）「からだ」、「こころ」、「いのち」を統合する医学を実践する。
- （三）ホリスティック（全人的）な人間観と医学観を持ち合わせた医療従事者を育成する。

という三点を基本理念としており、通常の西

洋医学はもとより、細胞治療；白血球の一つリンパ球（NK細胞）を体外で培養し活性化させて体内に再度戻すがんの治療法、温熱療法；ハイパーサーミアと言ってがん腫瘍部位を四三度以上に限局的に暖めて治療する方法、さらに、ホメオパシー、気功、漢方などを取り入れた代替医療、がん患者の心理療法であるサイモントン療法を取り入れたこころのケア、温泉や岩盤浴、森林療法などによる自然療法を積極的に導入しており、人間が元来有している「自己治癒力」を癒しの原点に置き、自己治癒力を高め、増強することを診療の基本としている。附属医院の医療スタッフは、もちろん治療・診療を施すが、ここでは、患者が自分に適合した療法を見つけるサポートをさせていただく、という姿勢が貫かれており、旧来の医療施設とは一線を画した取り組みを進めている。

もともと、このような医療体系は、アメリカにおいて「統合医療」として一般に広く浸透している。一九六〇年代、あまりにも要素還元主義に徹した現代西洋医学に疑問を持った人々が、より自然な形で身体の健康や病気を扱う「ホリスティック医療」というムーヴメントを起こしたのが端緒である。

「ホリスティック」とは、「全的」、「全人的」という意味である。科学の発展のおかげで、現代西洋医学は人類に大きな恩恵をもたらした反面、あまりにも医療が専門細分化したために、病気の治療を機械の修理のように行ってしまう風潮に対する警鐘でもあった。人間の身体は、部品の寄せ集めではなく、こころと精神（スピリッツ）を持っている存在であり、それらを包括的に診ていくことが必要だ、という考え方に立脚している。

やがて、ホリスティック医療は、一九八〇年代に「統合医療」と呼ばれるようになり、一九九四年には世界で初めて、アリゾナ大学医学部に「統合医療部」がアンドルー・ワイル博士によって開設された。当初は社会的な関心も低く、地道な活動であったが、医療保険制度が崩壊し、安価な医療が必要とされていたこと、物質主義・消費至上主義への疑問から、より自然な形で健康への取り組みを要望する動きが徐々に広がるようになり、現在では、アメリカにおいて「統合医療」という言葉は、一般の雑誌や新

聞に取り上げられるようになり、一般化したといっても過言ではない。また、その需要に応えるべく、すでに全米三〇以上の大学医学部に、医学生・看護学生に対する正式なカリキュラムとして採用されている。

メディポリス医学研究財団附属医院では、この統合医療を展開している。通常の診療に加え、世界に古くから伝わる、インドのアーユルヴェーダ、チベット医学、中国医学などの伝統医学を積極的に取り入れている。これらの医学は数千年の歴史を持っており、エネルギー（気）のバランス、過不足といった観点から健康を捉えるのが特徴である。人間の身体を小宇宙と考え、私たちは自然界や宇宙の一部であり、具合の悪いときには、自然の智慧の中から薬や手当ての方法を学ぶのである。故に、診療は生活と密接に関わる食事や運動、仕事、家族との関わり、リラックス法などの見直しから、考え方のくせの修正、人間関係の修復、自然との関わり、生きがい、死生観など多岐に及ぶことになる。これらは、まさに現代西洋医学が苦手とする「検査をしても特に異常がない」、「服薬が一日数十錠に及ぶ」、「がんなどで病気が進行し、もう治療法がない」などの場合に、特に威力を発揮する。

附属医院の病室は、多数の個室を有しており、その多くが二室の部屋があるので、家族は患者と一緒に宿泊可能である。要するに、家族宿泊型の医療施設というまったく新しい概念の医療機関なのである。終末期の患者と家族と一緒に宿泊して、家族が最後を看取することができる。この施設自体が一〇〇万坪を超える大自然の森の中にあるので、鳥の鳴き声を聞きながら、風に吹かれて木の葉が落ちるのを見て、自然の摂理である、「無常」をこころで感じ取ることができる。

人の生命の終焉に尊厳を持って接し、十分な疼痛管理下に、家族に看取られて、患者自らが枯れるように兜率の旅に旅立てる、そういう医療機関が、私の理想とするところである。

予防医療とは、突き詰めていえば、地球規模での環境保全と、日常生活全般に関わる意識改革という、とても大きな命題と向き合うことである。私は、自分たちの世代や次世代のみならず、遠く未来に続く世代が、健康で幸福な人生

を過ごせるよう長期的かつ大局的な観点から運営したいと考えている。

併せて、地中深くから湧き出る沸騰した源泉を利用した温浴施設を展開している。最近では、さまざまな温浴施設が注目を集めているが、『メディポリス指宿』では、岩盤浴とセラミック・スパ（霧島の高千穂からとれた光石を一〇〇〇度以上の高温で焼いて作ったセラミックを敷き詰めたスパ）を導入して、デトキシケーションの効用を医学的に調べていく。

これらの施設を利用することで、細胞の活性化、血流の促進作用、大量の発汗に伴う老廃物排出効果などが期待される。

「高度先端医療センター」は、『財団法人メディポリス医学研究財団』を母体とし、文部科学省、経済産業省、厚生労働省などの各省庁、そして、地元の鹿児島県、指宿市、鹿児島大学、各種医療機関、教育研修機関などと協働体制を組み、その構築が進められている。平成二三（二〇一一）年の開業を目指している「がん粒子線治療研究センター」では、粒子線（陽子線）を用いて、「切らずに治す」身体に優しいがん治療の研究と実践を推進していく。

がんは、我が国において昭和五六（一九八一）年より死因の第一位であり、「人口動態統計」によれば、現在では年間三〇万人以上の国民が亡くなっている。また、厚生労働省研究班の推計によれば、生涯のうちにがんにかかる可能性は男性の二人に一人、女性の三人に一人とされている。

さらに、がんは加齢により発症リスクが高まるが、今後ますます高齢化が進行することを踏まえると、その死亡者数は今後とも増加していくと推測される。一方で、小児の死因を見れば、依然としてがんが上位を占めている。

こうしたことから、がんは、「国民病」であると呼んでも過言ではなく、国民全体が、がんを他人事ではない身近なものとして捉える必要性がより一層高まっている。胃がん及び子宮がん等については、最近一〇年間で死亡率及び罹患率が横ばいとなっているのに対して、食生活の欧米化等により、肺がん、大腸がん、乳がん及び前立腺がん等については増加傾向にあるなど、がんの種類に変化が見られる。また、「平成

「一七年患者調査」によれば、継続的に医療を受けているがん患者数は一四〇万人以上と推計されているとともに、厚生労働省研究班の推計によれば、一年間に新たにがんにかかる者は現在五〇万人以上とされている。

その一方で、初期治療の終わったがん経験者が社会で活躍しているという現状もある。

こうした中、がん患者を含めた国民は、がんに関する様々な情報に触れ、がん医療に対して期待や希望を寄せ、また、がん医療に参加したいという希望を高める一方で、がん医療の水準に地域間格差や施設間格差が見られ、標準的治療や進行・再発といった様々ながんの病態に応じたがん医療を受けられないなど、実際に提供されるサービスに必ずしも満足できず、がん患者を含めた国民の立場に立って、こうした現状を改善していくことを強く求めている。

一方、長時間勤務といった医師を取り巻く厳しい勤務状況など、医療従事者をめぐる問題点にも目を向け、その改善を図りつつ、がん医療の充実等を図っていくべきであるとの指摘がある。しかしながら、我が国のがん医療については、手術の水準が世界の中でもトップクラスであるのに対して、胃がん等主に手術に適したがんが多かったこともあり、相対的に放射線療法及び化学療法の提供体制等が不十分であるとともに、緩和ケアが必ずしも治療の初期段階から積極的な治療と並行して実施されていないという状況である。

がん患者を含めた国民に対して安心・納得できるがん医療を提供するなど、がん対策のより一層の充実を図っていくためには、がん対策の企画立案や評価に際しての基礎となるデータが必要であるが、当該データを系統的に蓄積していく仕組みであるがん登録の整備が、我が国においては諸外国と比較しても遅れているという状況にある。

以上をまとめると、国の基本計画は、基本法第九条第一項の規定により、平成一九年度から平成二三年度までの五年間を対象として、がん対策の総合的かつ計画的な推進を図るため、がん対策の基本的方向について定めるとともに、推進計画の基本となるものとして策定されている。

#### (一) 基本方針

- ・「がん患者を含めた国民」の視点に立ったがん対策を実施する。

- ・全体目標の達成に向け、重点的に取り組むべき課題を定め、分野別施策を総合的かつ計画的に実施する。

#### (二) 全体目標

- ・がんによる死亡者の減少（七五歳未満の年齢調整死亡率の二〇％減少）

- ・すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上

#### (三) 重点的に取り組むべき課題

- ・放射線療法及び化学療法の推進並びにこれらを専門的に行う医師等の育成

- ・治療の初期段階からの緩和ケアの実施

- ・がん登録の推進

鹿児島県においては、県民の死亡原因の第一位は「がん」であり、毎年五〇〇〇人を超える方々が亡くなっている。加えて、数多くのがん患者の方々が、罹患した当初から身体的苦痛に加え、家族ともども様々な心理的苦痛、社会的苦痛等に直面しておられる。

誰もが生涯を通じ、安心して暮らせる社会をつくるためには、県民の健康寿命の延伸や「生活の質」の向上を図ることが必要であり、このため、「全ての県民が、がんを正しく理解し、がんに向き合い、がんを負けることのない社会」の実現を目指して、新たに「鹿児島県がん対策推進計画」の策定に至っている。

この計画は、がん対策の実施に当たって、鹿児島県の実情を踏まえた分野別の「個別目標」を総合的かつ計画的に推進することにより、「がんによる死亡率の減少」、「がん患者・家族の生活の質の向上」、「がん検診・がん医療の精度管理」という「三つの全体目標」を達成しようとするものである。

今後、鹿児島県は、この計画に基づき、がん患者を含めた県民参加のもと、行政や医療関係団体等が一体となって、がん対策についての具体的な取組を推進していく予定である。

この計画の中でも、「粒子線がん治療研究施設と県内のがん医療施設との連携体制の構築が必要である。」「医師会や鹿児島大学医学部と連携し、粒子線がん治療研究施設におけるがん治療研究促進のための調整に努める。」などが明

確に謳われている。

現在、がんの治療法として、次の三つがある。

- (一) 外科的治療。悪いところを切り取ってしまう手術。
- (二) 抗がん剤療法。化学療法あるいは免疫療法。
- (三) 放射線療法。

放射線療法は、アメリカでは五〇%以上の割合で、がん患者に単独あるいは複合的な治療法として選択されている。一方、日本では二割にも満たない程度でしか選択されていない。放射線療法はがんの種類によってはとても有効であるが、しかしながら、日本は世界で唯一の被爆国であるために、放射線自体に国民が強い精神的アレルギー反応を持っているおり、このために認知度と普及率が低いといえよう。

私は、放射線療法の中で粒子線治療という最新の治療法に着目した。粒子線治療は、従来の放射線療法（コバルト療法や、ラジウム線やガンマ線治療など）と異なる。陽子（プロトン）や炭素イオンなどの重粒子を、磁場を利用した加速器で光の速度近くまで加速して、がん病巣に狙いを定めて、そこに粒子のビームを照射する療法である。

その特徴は、身体の深部にあるがん病巣に局限してエネルギーを集中させることができるという点にある。これは、ブラッグ博士が見つけたので、ブラッグピークとも言われ、正常の組織にはほとんど影響を与えずに、がん病巣だけをピンポイントで治療ができる、画期的で夢のような治療法である。

従来のコバルト療法やガンマナイフによる治療だと、正常な組織にも高いエネルギーが伝わってしまい、そこに副作用が発現する。換言すると、従来の放射線照射では、深部組織にあるがん病巣を叩くには副作用を覚悟して、かなり強い線量を患部に当てる必要があったのである。

ところが、粒子線治療は、がん病巣を狙ってその部分に局限して最大のエネルギーを集中させることができる、という点で大きな違いが存する。しかも、誤差が一〜三mm以下という極めて高い精度で照射すること可能である。

ここ数年、粒子線治療の効果は、数千例の治療結果からその有効性が明らかになってきた。

前立腺がん、肺がん、肝臓がんなどの症例で非常に高い治療効果が確認されている。

粒子線治療施設の建設には、莫大な費用を要する。陽子線治療施設を作るとなると一〇〇億円を超える建築費用が必要となる。しかし、がんに苦しむ患者にとって、粒子線治療の確立と普及は光明であり、その点で「光」を放つものをつくりたい」という私達の志向と合致する。

粒子線治療は、一日二〇分程度で済んでしまう。実際には、治療としては粒子線の照射だけであり、従来の外科的手術に伴う長期入院、退院後の加療などの煩わしさから患者は解放される自由度の非常に高い治療法といえよう。患者のQOL（Quality of Life：生活の質）も格段に向上する正に画期的ながん療法である。これらの施策を通じて、さらに高度で良質な医療を提供していくことで、病の苦しみと死の苦悩に直面する患者を救うことができれば本望である。

今後は、先出の基本計画に基づき、国及び地方公共団体、また、がん患者を含めた国民、医療従事者、医療保険者、学会、患者団体を含めた関係団体及びマスメディア等が一体となつてがん対策に取り組み、がん患者を含めた国民が、進行・再発といった様々ながんの病態に応じて、安心・納得できるがん医療を受けられるようにするなど、「がん患者を含めた国民が、がんを知り、がんと向き合い、がんに負けることのない社会」の実現を目指すことの一翼を担う所存である。

「こころのケアセンター」では、「医師が病気を治す医療」から「病を患う人間と、医療を行う人間同士が、お互いに人間として尊敬し、理解し合い、身体とこころの両面から癒すことができる医療」の実践を目的として掲げ、『二一世紀高野山医療フォーラム』との協働を目指している。また、コンピューター・グラフィックデザインの第一人者、平山則廣氏が制作した、光のアート『Ascension』（アセンション；二万個のLEDを利用した異次元を思わせる空間を演出する設備）を設置し、光によるこころの緩和ケアを試みている。言葉で説明するのは難しいが、光の映像と静かな音楽を駆使して、視覚と聴覚に優しく刺激を与えることによって、身体が浮遊する感覚となり、こころに癒しと安ら

ぎをもたらす装置、と表現すればイメージがつかめるであろう。この装置の内部に身を横たえ、光溢れる幻想的な映像と妙なる調べに包まれながら、しばし異次元の世界でところを遊ばせる、不思議なリラグゼーション効果が体験できるのである。

思えば、平成一六（二〇〇四）年グリーンピア指宿の跡地を取得して以来、四年の歳月をかけて『メディポリス指宿』構想は着々と完成への道筋を辿っている。構想発表当初は、実現に疑問符を投げかけたり、無茶だと評する声もあった。しかし、財団法人の設立、宿泊施設の開業、財団附属医院の開業など、一つひとつの実績を積み重ねていくうちに、周囲の見方は徐々に肯定的となり、今や総合医療都市の一日も早い全面開業に期待の声と温かい支援が寄せられるようになった。実際、平成二〇（二〇〇八）年七月五日には、「がん粒子線治療研究センター」の着工式が挙行され、多くのマスコミからの取材を受けた。

到底叶わぬと思われる壮大な夢（＝大欲）といえども、一人が行動を起こし、わずかながらでも前進し続けていれば、如来の加持のお導きによって、不思議と周囲の賛同や力添えを得て、密厳浄土は現世において実現するということを肌で実感した次第である。

## 二.「二一世紀高野山医療フォーラム」について

従来の西洋医学偏重型の「医師が病気を治す」という一方通行的な医療を、「病を患う人間と、医療を行う人間同士が、お互いに人間として尊敬し、理解し合い、身体とこころの両面から癒すことができる」双方向的かつ魂の融合医療の実践と普及を目指したいという考えが以前から私にはあった。

近年、医療技術は急速に発展してきたものの、患者の立場からは「苦悩、苦痛からの開放」には程遠いのも事実である。そこで「苦悩、苦痛からの開放」という問題に真摯に取り組んでいくことを、池口恵観先生とともに高野山大学(高野山金剛峰寺)に提案して、平成一七(二〇〇五)年の春に高野山大学に寄付講座を申し出たことに本フォーラムは端を発する<sup>27</sup>。

当社の企業使命でもある「人類を苦痛からの開放する」ことを目指して踏み出した小さな一歩が、池口恵観先生のお力添えを賜り、真言宗総本山高野山の後ろ盾をいただき、医学界、宗教界、その他各界を代表する碩学高德の諸氏に理事職にご就任いただくまでに大きく広がった。以下に、第一回の理事会で理事になられた方々を列記する。

### 【理事就任者(第一回理事会時点)】

|         |                 |
|---------|-----------------|
| 柳田 邦男 氏 | 作家              |
| 森 亘 氏   | 元東京大学総長         |
| 井村 裕夫 氏 | 元京都大学総長         |
| 吉田 修 氏  | 奈良県立医科大学学長      |
| 南條輝志男氏  | 和歌山県立医科大学学長     |
| 養老 孟司 氏 | 東京大学名誉教授        |
| 山折 哲雄 氏 | 元国際日本文化研究センター所長 |
| 柏木 哲夫 氏 | 金城学院大学学長        |
| 村田 久行 氏 | 京都ノートルダム女子大学    |
| 南 裕子 氏  | 国際看護師協会会長       |
| 南野知恵子氏  | 元法務大臣           |
| 池口 恵観 氏 | 最福寺大僧正          |
| 永田 良一   | 新日本科学社長         |

多忙を極める理事の先生方がスケジュールの合間を縫ってお集まりいただき、第一回理事

会を開催、この全く新しいフォーラムの方向性が真剣に議論された。その中で「生と死が手を結ぶには」という今までにはない、今日的なテーマを見出すことができた。そして、この理事会において、それぞれに専門の違う理事の先生方との間に問題意識を共有できたこと、そしてより良い医療、より良い社会の実現に向けた話し合いの場を設けられたことは、私にとって望外の喜びであった。後に、井形昭弘(前鹿児島大学学長)も新たに理事に就任された。

その後の検討も経て、記念すべき第一回フォーラムは、二〇〇五年一月三日(日)、東京国際フォーラムにおいて開催された。「生と死」「宗教と医療」という重苦しいテーマにどれだけの社会的関心が集まるのかという心配は、会場を埋める満員の聴講者(千三百六十四名)を見た時、単なる杞憂であることがはっきりとした。むしろ予想以上の社会的関心に、今後の継続的な取り組みに大きな励みとなった。聴講者のうち最も多かったのは医療の現場で生老病死の苦痛・苦悩と最も身近に接しておられる看護師の方々であった。反面、宗教関係者の参加は予想以上に少ないものであった。こうしたことから高野山が主体となっていくこの試みが将来の医療のあり方を模索する上で大きな意義のあるものであるという確信を持つに至った。

この第一回フォーラムにおいて講演いただいた元文化庁長官である故・河合隼雄先生の冒頭の言葉は、『生と死ということと共に考える、しかもそこには医学関係の方はもちろんですが、宗教学に関係する方もおられる、看護学に関係する方もおられる、私のように臨床心理学に関係する者もいる。このように色々な者が集まってこの問題を考えていきたいと思います。このことは恐らく今世紀において非常に大事な問題になるのではないかと私は常々思っております。』というものであった。近代医学ではある意味「死」は敗北であった。二〇世紀の近代医学の急速な進歩によって私たちの寿命は著しく延びたが、「死」そのものがなくなったわけではない。ゆっくりとやってくるようになった「死」が現在の医療を巡る諸問題、そして人々の苦痛・苦悩の元にもなっているようにさえ思える。二〇世紀、私たちは医学・医療の観点から「生」だけを考え過ぎてきた。二一世紀、私

たちは宗教も含め様々な観点から「生と死」を考える必要があるだろう。二世紀高野山医療フォーラムはその魁としての役割を果たすものであると考えた。

第二回フォーラムは二〇〇六年五月二十一日（日）、大阪国際交流センターにおいて実施され一二八〇名の参加者があった。第三回フォーラムは二〇〇六年十月九日（月）、メルパルクホール福岡において開催され、千二百名以上の参加者を得た。回を重ねるごとに聴講希望者の数も増え、会場の都合からお断りしなければならない状況さえ生まれてきた。

聴講者の内訳として、第一回同様に看護師の参加が最も多かったが、宗教関係者の数も徐々に増えてきた。この第一回から第三回までのフォーラムの講演やシンポジウムの内容を取りまとめたものが書籍<sup>28</sup>として上梓されている。さすがに各界の重鎮・権威が集い、医学・医療と宗教の交流あるいは相互理解を目指し、その学識と経験を余すところなく披瀝している書籍だけあって、大変に示唆に富んでおり、かつ読み応えのある一冊に仕上がっている。今後、本フォーラムの進捗に伴い、二冊目、三冊目も追々上梓されることになろうが、単に一過性のフォーラムの開催だけではなく、その内容が記録され、広く世に問われ、長く形を留めることには大きな意義があるものと考え。この書籍が医療関係者を育成する教育機関において、生命倫理学の教科書あるいは参考書として大いに利用されることを期待する。

第四回フォーラムは二〇〇七年八月三十一日（金）～九月二日（日）、高野山大学松下講堂において開催された。場所の便、宿泊等、開催に向けた困難も予想されたが、高野山関係者、宿坊協会等の協力の下に無事開催にこぎつけることができた。弘法大師空海が開山された聖地高野山での開催は、聴講者にこれまで同様の講演、シンポジウムに加え、澄み切った空気と自然を体感してもらうことが目的でもあった。特にこれまでの傾向から多くの聴講が予測される看護師の方々には日々の看護で疲れたところを癒していただきたかった。三日間で延べ二〇〇〇名を超える聴講者が集まったことから当初の目的は達成されたと考える。また、九月二日の早朝には総本山金剛峰寺において営まれた供

養に数百人の参加者が集まったことから、宗教、高野山真言宗そして本フォーラムへの大きな期待が感じられた。高野山での第四回フォーラムを折り返し点として本フォーラムは延べ五年間の歳月を掛け、今後も全国各地で開催される。一人でも多くの方が生老病死の苦痛・苦悩から解放されるよう、実りある内容で実施されることを願って止まない。そのためには、微力ながら私もフォーラムの運営に全力を傾注していく所存である。なお、第五回フォーラムは二〇〇八年九月十五日（月）、東京国際フォーラムにおいて開催された。

### 三. インターナショナルスクール創設について

人材の育成は、恒久的な人類の繁栄の礎であり、次世代を担う若者に可能な限り整った環境で教育を受けさせることは、我々の責務である。

社会的背景として、日本は戦後の経済成長により、物質的な豊かさの向上をもたらした。物質的生活力の向上は子供の教育環境にも影響を及ぼし、過剰な学力偏重教育とゆとり教育の間で揺れ動いている状況にある。また、「少子高齢化に伴う教育現場と地域との共存関係の構築」、「ボーダレス化に伴う真の国際感覚と国際経験の必要性」、「国際的な競争力が激化する中でリーダーシップ、アイデンティティの醸成」等、一刻も早く取り組むべきテーマが浮上している。

今、既存の枠組みを越え、真の教育、地域との共存、主体的な貢献ができるオープンコミュニケーション、豊かさの追求と真剣に向き合う時期に来ている。

一方で世界の流れとして、国際的人材の育成が国家戦略であるという意識の高まりは時代の潮流であり、諸外国におけるその認識は総じて日本より高い。国際社会の中で共存し、自国のプレゼンスをより一層高める意識の高い諸外国においては、次代に向けた教育システムの導入を着実に進めている。世界成長の原動力と言われているアジア諸国では、近年ビジネス領域での国際化が急速に進んでいる。その流れを受け、次代の国力の源泉を確保するため、国際的な教育プログラムの構築に注力し始めている。“世界では、グローバル人材の育成は国家戦略である”ということを我々日本人も今一度認識すべき時に来ている。

このような中で日本の状況について言及すると、国際人材育成については、国家戦略として認識されているとはいえない。制度的にも、インターナショナルスクールは「各種学校」として位置付けられ、特に小中学校においては日本国籍の子女をそこに通わせることは義務教育違反になる上、各種学校の高校を卒業してもそのまま日本の大学入学資格は得られない。しかし、グローバルスタンダードな教育機会を求める日本人は増加傾向にあり、インターナショナルスクールの入学希望者も増えている。一方、日本に

居住する外国人の数、外資系企業の数、帰国子女の数が年々増えており、インターナショナルスクールへの入学者が後を絶たない。日本人が入学するのは狭き門となっている。以下、日本のインターナショナルスクールに関する現状認識を列挙する。

#### (一) 脆弱な日本の国際教育事情

国際競争力の高い人材を育てるためには、高水準で国際的な修了資格を得られるプログラムに沿った教育をしていくことが重要である。主なインターナショナルスクールは、国際的な評価団体から認定を受けており、日本・海外の高等教育機関への機会は開かれている。しかし、その数はまだ少なく、日本に「インターナショナルスクール」と呼ばれる学校は一〇〇校以上に上るものの、国際的な評価団体(WASC/ECIS/ASCI/IB)の認定校は二〇校程度である。文部科学省により、WASC/ECIS/ASCIの認定校は日本の高等学校卒業と同等以上の学力があると認められており、平成一六年九月の施行以降、現在一六校が認められている。また、国際的な教育プログラムで、海外への大学進学に優位である、国際バカロレア(IB) Diploma資格(DP)認定校は一一校である。現在の日本は、レベルの高い国際教育を受け難い状況にある。

#### (二) 増加する海外留学者数

このような中、日本人も海外での教育を求める傾向が強くなっており、日本から海外へ留学する人数は年々増加し、現在では七万人を超える。海外赴任者の家族の中には、赴任者が帰国する際、子息のみ引き続き海外で生活を継続するケースも増加している。つまり、グローバルスタンダードな教育機会を求め、海外へ流出(留学)する。

#### (三) 国際化の進む東京

一方、日本に居住する外国人の数は年々増加しており、一五六万人になる。外国人が多く居住しているのは東京都で、全外国人の一六%。首都圏(東京・神奈川・千葉・埼玉)で考えた場合は約三三%に及ぶ。また、外資系企業の七〇%が東京に拠点を構えており、外国人が首都圏に集中していることがわかる。外国人が増加傾向にある中、人、企業とも東京エリアへ一極

集中している。

#### (四) 帰国子女も東京に集中

帰国子女は全国に一万人以上という高い人数で推移しているが、そのうち二五〇〇人が東京に居住しており、帰国子女全体の四分の一にあたる。インターナショナルスクールが狭き門となっているため、帰国子女の日本での新しい学校は、通常の日本の学校に通わざるをえない状況となっている。帰国子女も、外国人、外資系企業と同様に、東京エリアへ一極集中している。

上記の事実に基づき、日本におけるインターナショナルスクールの現状を踏まえた時、現在の制度下において、既存機関による国際的に卓越したリーダーシップを発揮できる人材の輩出には限界があると言える。国際依存度の高まる今日において、上記現状から、教育に対してしっかりとした理念の下、学校運営者として主体的に事業者として責任を持ち、信念を持って取り組む機関の出現が待ち望まれる。今こそ、国際的に卓越したリーダーシップを発揮できる人材を輩出できる機関を設立する時だといえる。特に、国際化が進む東京エリアにおいて、ハイレベルなインターナショナルスクールを設立することは大いなる意義がある。

学校は地域社会の共同財産であるという考えに基づいて、学校の施設、機能を地域社会に開放することについて、学校、地域、行政の間で盛んに議論され始めている。「学校と地域社会の交流～学校教育の活性化と学校教育機能の地域解放を推進する。」「学校施設の開放～地域交流の拠点として位置付け、学習の場の開放と拡充を促進する。」といった相互交流機会の提供により、学校と地域社会の生活文化のさらなる充実を目指す事が今後益々重要になっていく。また、地球規模で生活文化の多様化が進むにつれ、単に学校を地域に解放するだけではなく、地域特性を活かし多様化した学校機能の存在が求められる。世界を代表する国際都市・東京でも、オープンコミュニケーションの場としての地域に開かれた学校を開設し、そのニーズに応えるべく本格的に取り組む時期が来ている。

“社会の財産は「人材」。人が「人材」であるために必要な「こころ」を大切にする”という当社の理念に基づき、以下の基本方針の下、本事業目的は、次世代のリーダーを育成し、人

が集う開かれた場を形成し、世界をリードする文化コミュニティ拠点の構築により、より多くの人々に対し高い付加価値を提供できる事業を構築して行くことを使命と考えている。

国際社会で卓越したリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指すには、在日する外交官や海外一流企業のエグゼクティブの子弟、海外での生活経験が豊富な日本人帰国子女を積極的に受け入れて、世界に誇る教育システムの中で、国家の将来を担うべき若い人材が未来社会での有用な人脈を形成しつつ、国際感覚を養うことのできるグローバルな教育環境を作ることが肝要である。ハーバード大学の職員らで構成する私的諮問委員会で選定されるインターナショナルスクールでの経験豊かな教師陣による、国際バカロレア機構の定める履修基準を充たしたハイレベルなカリキュラムを提供することでこの教育環境を整えることができる。また、礼節と信義に基づく日本のよき伝統を人格形成の基盤としつつ、多様な世界観、価値観を受け入れることのできる寛容性に富んだ国際感覚の豊かな人材を育成する。加えて、自由と規律、独立心と協調性、自己発現と相互理解、の均衡が取れた人格教育を通じて、自律主体的に学び、考え、話し、行動できる、世界の政治・経済など各分野に貢献できる人材を育成する。

開かれた学校と地域社会の実現による地域・世界・次代に誇れる拠点づくりとして、学校本来の役割である「学びを通じた交流の場・機会の提供」をもとに、より多くの方に学校施設を開放の上、人的接点や学びの機会を創出することにより、地域の財産となる。21世紀の新産業創造拠点として、職・住・学・遊の多様な魅力を備え国際的に情報発信を行う先導的な拠点を形成する。

事業目的を可能にするコンセプトとして、“国際性豊かな人材育成とオープンコミュニケーションにより全ての人々と共に豊かで新しいコミュニティを醸成する”ことを推進したい。社会的背景から国際教育と地域発展への取り組みが必要とされる中、現時点では、以下の四点を骨子として、平成二五（二〇一三）年四月の開校に向けて各種取り組みを進めている最中である。

- (一) ハイレベルな教師陣による教育（世界最高峰の教育研究機関であるハーバード大学関係者の協力）。
- (二) 帰国子女のみならず、滞日諸外国エグゼクティブの子弟も積極的に受け入れる。
- (三) 多国籍・多言語・多文化で構成されるグローバルな教育環境を整える（国際感覚豊かな人材の育成）。
- (四) “自律心と協調性”、“自己発現と相互理解”の調和を目指す。（礼節と信義に基づく日本の古き良き伝統を基盤としつつ、多様な世界観・価値観を受容できる人格形成＝寛容の精神）。

その高邁なる教育理念を現代において実践することにもなる。私の残りの生涯を通じて全身全霊を込めて取り組んでいく所存である。

人間の好奇心・向学心には際限がない。生涯に亘って学び、気づきを得、成長し続けることこそ、人が人たる所以である。こうした生涯学習・日々成長の精神が世代間に連綿と受け継がれることによって人類は種族として進歩・発展を遂げてきた。個と個は相互に不可分に連関渉入し合い、融和することにより更なる高みへ昇っていくものである。これこそが、空海密教の世界観であり、私の人生の信条でもある。

私は、幼いうちから知識偏重の詰め込み教育を施すことに、さほど重要な意義を感じていない。むしろ、幼少期においては、その後の長きに亘る社会生活で必要とされる人格の練磨・陶冶こそが重要であると考えている。私の生地、鹿児島では、江戸時代の武士階級子弟の育成法として郷中教育が根付いていた。地域社会に居住する青少年をいくつかのグループに編成し、「頭（かしら）」と呼ばれるリーダーの統率の下、「心身を鍛錬せよ」、「嘘を言うな」、「弱い者いじめをするな」、「質実剛健たれ」と言ったところの持ち様、人として当然振舞うべき行動指針を徹底的に幼少期から刷り込むものである。テクニカルな受験技術や知識の伝授は、入試という人生の限られた一局面では有用かもしれないが、社会生活でどれ程の効能を発揮するのか、甚だ疑問である。

その疑念を払拭し、次代を担う人材養成機関の設立を企図して、国境や言語、人種や性別を超えて「世界人」の輩出したいのである。これは、空海の綜藝種智院の建学精神を受け継ぎ、

## 結語

「ありがとう」と人に感謝され、人々から「すばらしい」と賞賛されたときに、自分は清々しい気持ちになる。何ら利益を得るわけでもなく、物品を獲得できるわけでもない。しかし、気分はとても爽快である。人は、必ずしも金銭や物質的なものだけに価値を見出しているわけではないことが理解できる。人の役に立ちたい、困っている人を助けたい、子孫に大切な何かを伝えたい、次世代の人たちに何か役立つものを残したい、いずれも直接的に自分の利益にはならないことに価値を見出すことができるのが人間である。

自分という個の壁を乗り越えて、大宇宙の大生命体の一構成部分としての自分、人類の一部としての自分、社会の構成員の一人としての自分、世代を担っている自分に気づいたとき、次世代に必ずバトンを渡すことが不可避であるという事実を認識できる。すなわち、人は必ず死に逝くということから目を背けずにしっかりと認識することで、個として自分が捉えている世界を超越でき、己の生命を人類の生命の一部として実感することができる。そこには、個体の寿命を遥かに超えた生命の連鎖が窺える。同時に、自分の限りある生命の尊さにも気づく。死を真剣に考えたときに、はじめて生のすばらしさが浮き彫りにされるのである。それも個体の生から集団、人類、世代、という意味での生を考えることにより、自らの生命を永らえることができるのである。あらゆる行動を起こすのに必要なエネルギーの源泉となるモチベーションは、この真理を自ら受け入れたときに、こころの底から泉のように湧き出してくる。食欲にモチベーションの種をかき集めようとしても、所詮、それは浅はかな人間の考えること、思い通りにいかないことのほうが多い。快樂を得ることや結果を出すことのみに想いが集中してしまい、焦りが出て、結果として、集中力を欠き、さまざまな妄想に悩まされ、思い通りの結果は得られなくなる。大事なことは、自分のこころの感受性を高く持ち、その時々で如来が授けるモチベーションの種を感得しうるか、ということである。私は、どのような苦難のときにでも、「何とかなる」という気持ちで焦らずに、

そして諦めることなく全力を尽くしたい。ここに即身成仏義の現代的意義を実践により体得できると考える。

人間、欲ばかり持つといけない、と言われるが、私は、人間は、小さくても良いからいろいろな欲をできるだけ多く持つべきであると考え。欲には意味がある。それは、人間の元気の源であり、モチベーションの源泉ともなる。欲を持てば、リスクを負っても何かに挑戦しようとする。これは、社会の活性化につながる。欲しいもの、したいこと、なりたい状態、自分が欲することが何であるのか、常に自分のこころに問いかけ続ける姿勢が必要であると考え。初めは、小さな欲、身近な欲でも、周囲に迷惑を及ぼすものでなければ、どれだけ多くても良い。好きなだけの欲を持つことで、生きる力が湧き出してくる。小さな欲、身近な欲を徐々に育み、欲を調整しつつ、そこから、公益性の高い、多くの人々に幸福をもたらすような大欲に昇華させ、その実践を通じて社会に貢献できれば、それに勝る喜びはない。「大慾得清淨 大安樂富饒」とは、実践による小さな成功体験の大いなる積み重ねであると考え。

「情熱と行動の人」弘法大師空海の教えと実践は、現代社会において事業活動を営むに当たり、大いなる功德をもたらすことを述べた。すなわち、発心し（理想を持ち）、菩薩行を積み（果敢に行動し続けられ）、この身このまま仏と成れる（即身成仏が叶う）ということである。以下は、今秋発刊される書籍<sup>29</sup>に寄せた私の小文である。

### 『夢を叶える方程式』

私にとって夢の定義とは、「将来必ず実現させたい目標」、「叶えるべき理想」を示します。

私は、会社経営の舵取りを任されてから、事業拡大、海外進出、財団設立など、いくつもの夢、念願を果たしてきました。その経験から紡ぎ出された「夢を叶える方程式」をご紹介します。

①心底から夢を叶えたいと希求する「情熱」、②どのような困難も智慧の試練と捉えて乗り越えていく「不屈の闘志」、③達成感と賞賛や感謝などの無形の「ご褒美」、④自分がやらなければ

誰がやるんだ、という「使命感」、⑤これをやり遂げなければたいへんなことなるという「危機感」、これらがここに強いエネルギーを生み出す五大原動力です。この「こころの原動力」に、社会に貢献し、人類に幸福をもたらす「公益性」が加わると、多くの人々の支援や思わぬ人の協力が不思議と得られるようになり、目標達成に必要なエネルギーがここに供給されるようになります。

こころが十分に充電されたならば、迷うことなく一気呵成に「行動」します。頭の中で思い描くだけでは一歩も前へ進めません。「行動」を起こして初めて夢は実現に向かうのです。失敗しても真摯に反省し、原因の究明と再発防止策を練りあげた上で、再び一歩前進すれば良いのです。以上を方程式化したものが、私の「夢を叶える方程式」です。

#### 夢の実現＝

（「こころの原動力」＋「公益性」）×「行動」

こころの正しい持ちようと適確な行動が夢を現実に叶えてくれるのです。

本学における二年間の修士課程の修学期間には、会社を取り巻く環境にも変化があった。平成一九（二〇〇七）年は、創業五〇周年という節目の年を迎えることができた。記念行事として父親の胸像を鹿児島本店の正面玄関に設置した。父親が元気なうちにこの胸像を見せることができ、ほんとうに良かったと思う。父親も感激していた。また、同年に東京証券取引所に、上場市場変更の申請を出し、審査が行われた。その結果、平成二〇（二〇〇八）年三月一日をもって、新日本科学は東京証券取引所第一部への市場変更を果たすことができた。大いなる進展の年であった。

これは、当社の社会的存在意義が高い評価を受け、我が国でももっとも高い健全性と透明性が要求される証券取引市場に名を連ねて事業活動を展開していくことが認められたということである。大変名誉なことと真摯に受け止めるとともに、この市場変更は、あくまでも通過点であり、新たな企業ブランド構築のための出発点と捉え、今後とも、さらなる企業価値の向上と、社会貢献を通じた公益性の向上に取り組み、企業の使命を全うして行く所存である。

最後に、私は、弘法大師空海が生命をかけて日本に宣布した密教の教えを企業経営に活かすことができほんとうに幸せであると感謝している。そして、わが師である池口恵観先生と本研究科の指導教官である生井智紹先生にここから感謝申し上げて本稿を閉じることとする。

以上

## 脚注

- <sup>1</sup> 梅原猛『空海の思想について』講談社、一九八〇年、九頁
- <sup>2</sup> 岡村圭真『空海の魅力』（高木神元・岡村圭真編『空海密教の聖者』所収）吉川弘文館、二〇〇三年、三〇頁
- <sup>3</sup> 福永光司訳『三教指帰』中央公論新社、二〇〇三年、七頁
- <sup>4</sup> 『続日本後記』など一説に宝亀四（七七三）年発丑とされるが、ここでは高野一山はじめ真言諸派の行事等が依って立つ通説に基づく。松長有慶『空海・心の眼を開く』大宝輪閣、二〇〇二年、一八頁、高木神元『空海 生涯とその周辺』吉川弘文館、一九九七年、二～三頁、他
- <sup>5</sup> 山本智教訳注『三教指帰』（『弘法大師空海全集第六巻』所収）筑摩書房、一九八四年、五頁
- <sup>6</sup> 山本智教訳注『三教指帰』（『弘法大師空海全集 第六巻』収集）、筑摩書房、一九八四年、六頁
- <sup>7</sup> 松永有慶『空海の生涯・思想と『三教指帰』』（『空海 三教指帰ほか（福永光司 訳）』所収）、二〇〇三、中央公論新社、一六頁
- <sup>8</sup> 宮坂宥勝『空海』、二〇〇三、筑摩書房、一一六頁
- <sup>9</sup> 頼富本宏『空海と密教』、二〇〇二、PHP 研究所、五七頁
- <sup>10</sup> 司馬遼太郎『空海の風景（上）』中央公論新社、一九七八年、一一九頁
- <sup>11</sup> 同上、二二〇頁
- <sup>12</sup> 牧尾良海訳注『遍照發揮性靈集 卷第九』のうち「勅答」、（『弘法大師空海全集 第六巻』所収）、一九八四、筑摩書房、五九六頁
- <sup>13</sup> 岡村圭真『即身成仏義を読む』、高野山大学、二〇〇五、二頁
- <sup>14</sup> 岡村圭真『即身成仏義を読む』、高野山大学、二〇〇五、六八頁
- <sup>15</sup> 那須政隆『即身成仏義の解説』、成田山仏教研究所、一九八三、二〇四頁
- <sup>16</sup> 金岡秀友『空海 即身成仏義』、太陽出版、一九八五、二一二頁
- <sup>17</sup> 北尾隆心訳注『声字実相義』（宮坂宥勝監修『空海コレクション2』所収）、筑摩書房、二〇〇四年、一五五頁
- <sup>18</sup> 松長有慶『空海 般若心経の秘密を読み解く』、春秋社、二〇〇六、一九〇頁
- <sup>19</sup> 宮坂宥勝『空海密教の宇宙』、大法輪閣、二〇〇八、九三～九五頁
- <sup>20</sup> 梅原猛『空海の思想について』講談社、一九八〇年、六四頁
- <sup>21</sup> 岡村圭真『即身成仏義を読む』高野山大学、二〇〇五年、九七頁
- <sup>22</sup> 宮坂宥勝『空海 生涯と思想』筑摩書房、二〇〇三年、一一八頁
- <sup>23</sup> 宮坂宥勝『空海 生涯と思想』筑摩書房、二〇〇三年、一二四頁

- <sup>24</sup> 山本智教訳注『三教指帰』、（『弘法大師空海全集 第六巻』所収）、筑摩書房、一九八四年、五頁
- <sup>25</sup> 金岡照光訳注『遍照發揮性靈集 卷第七』のうち「四恩の奉為に二部の大曼荼羅を造る願文」、（『弘法大師空海全集 第六巻』所収）、筑摩書房、一九八四年、四一八頁
- <sup>26</sup> 株式会社大林組『季刊大林 No.40 満濃池』、一九九五年、一一頁
- <sup>27</sup> 静慈圓、「まえがきー苦痛・苦悩からの解放を目指して」、柳田邦男・静慈圓共編、『「生と死」の21世紀宣言』、青海社、二〇〇七年、三頁
- <sup>28</sup> 柳田邦男・静慈圓編『「生と死」の21世紀宣言』青海社、二〇〇七年
- <sup>29</sup> 『2009年 トップが語る一日一話 仕事の指針・心の座標軸ー私の夢・会社の夢』PHP 研究所、二〇〇八年